



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	源氏物語論 : 女三宮の降嫁をめぐって
Author(s)	大朝, 雄二
Citation	北海道大学人文科学論集, 10, 3-66
Issue Date	1973-12-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34306
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P1-66.pdf



源氏物語論

——女三宮の降嫁をめぐる——

大 朝 雄 二

一

若菜巻に至ってこれまで全く話題にのぼっていなかった女三宮が新しく登場し、六条院の正妻として春の御殿の寢殿に入ることになる。この女三宮の降嫁は極めて唐突であり、しかも、これ以後に展開する物語世界が藤裏葉巻まで大きく変っていることについて、これまでも先覚諸家によって論じられている。いま若菜巻ないしは女三宮降嫁に関する研究史を細かに跡づけることは省略に従わざるをえないが、与謝野晶子女史が詩人的直観で若菜巻以降は紫式部の筆でないと説いて以来、若菜巻で区切られる物語世界が問題にされているのは注意してよいと思われる。すなわち、論争として戦後になって花開いた成立論および成立論議を踏えた主題性の論は、藤裏葉巻までが原初構想を核にして複雑な成立過程を含むものと把握して三部構想を説くのであったのが、その捉え方の深部において与謝野女史の直観した若菜巻以下が異質であるという指摘に触発されるものがあったと言えよう。しかし、与謝野女史は「若菜上下の文章は前編に比べてにわかに冗慢の跡いちじるしいのは、後篇の作者がその書き始めだけに、しばらく未熟なのを示しているのである」と論じられていたのに対し、現在の三部構想説にあっては第一部をして古物語制約の下にあるめでたしめでたしで大団円を迎える物語世界と見、第二部がそれを質的に超克するものと理解するのであって、

同じ若菜巻以前と以後の違いを問題にするにしても、与謝野女史と現在の通説とは正反對な評価がなされているのである。若菜巻以下がそれまでの物語世界にくらべて雰囲気が違っていることを直観された与謝野女史の提言は、たしかに鋭いものがあつたと言ふべきではあるが、それが直ちに作者が別であるということに短絡されるものでないことは多言を要しまい。と同様に、若菜巻でもって物語世界が截然と質的に分断されるという解釈、つまり、第一部の物語が古物語的世界として第二部にくらべて一段価値の低いものという判断もまた、一往、留保されるべきものはあるまいかと私は考える。成立論議そのものにしても、いわゆる玉鬘系十六帖が一括して後記補入されたものと考えるのは、いまだ多くの問題をかかえていると言わなければならないのである。

その場合、与謝野女史が別人の筆と直観し、第二部が質的に第一部を超える世界と認定させる要素、すなわち、若菜巻で全く新しく女三宮が語り出されるという事実は事実として無視も軽視もできない。小論では女三宮の降嫁をめぐって、藤裏葉巻で完了したかに見紛う物語世界を抜け出して、そこに女三宮を投入するということが作者のいかなる営みであつたかを考究し、女三宮の登場をめぐって鮮明になつていられると思われる源氏物語の独特な長篇構造を考察したいのである。

二

先の機会に私は、源氏物語の時間的秩序を考え、源氏物語研究で年立の論が成り立つのは、物語内部に年立を成り立たせる要因が先在しているからであり、源氏物語が長篇物語であるのは、外でもなくそのような年立を成り立たせる要因を物語内部に持つ語り口によつてであると考えたのであつた。^{注2}それは、「年もかへりぬ」といった記述でもって、物語内に流れる歳月を綿密に写し出してくる手法に認められるものであつた。しかも、そのように継続し累積する歳月の相は、桐壺巻から幻巻まで均質に認められる現象なのではなく、おおよそに言つて次のような特徴を備えて

いるものである。

1 葵巻以前では年末年始のけじめを明記する記述が少く、末摘花・紅葉賀の二帖に亘って同年の新年が重複して語られてゐるのみであること。

2 葵巻から柏木巻までの間にあつては、いくつかの例外を除いて、おおむね「年もかへりぬ」のような明示がなされてゐること。

3 柏木巻を最後として、横笛以降では年末年始を継続的に捉える語り口が姿を消すこと。

ここではつきりすることは、継続する歳月が描き出されているという現象は、主に葵巻から柏木巻までに限定されているということである。だから、年立の論として源氏の年令を推算する作業が有効性を持ちうるのは、葵巻から柏木巻までに限られるのであり、光源氏の物語の初期と終末部分は年立的秩序が稀薄であると言わなければならないのである。このことは源氏若年の物語と晩年の物語が、それぞれ孤立的な挿話で構成されていることと対応するものであり、年立の成り立つような長篇構造の物語の前後に、孤立的短篇的な物語傾向が認められるということに外ならない。ここに源氏物語が無限定の長篇物語ではなく、かつ、短篇の集積としての長篇と割り切れない独得の構造があると思われるのであるが、その詳細にわたる考察は他日を期さなければならない。

ともあれ、古来、年立の論が研究史の重要な領域を占めているのは、右に指摘した語り口があるゆえと言えようが、問題は作り物語にあつてこのような継続する時間が描き出されているという事実そのものにある。實在の人物の伝記のように、或いは歴史物語のように、語り続けるべき素材が先在していて、その事実に倚りかかつて継続した記述が可能であるというならばともかく、光源氏という理想人物を作り出し、その虚構世界があたかも日記的時間とでも言い得るような様態を示していることにこそ、源氏物語の驚くべきリアリティの本体があつたと言えるのではあるまいか。光源氏の物語に流れる累積する歳月が、光源氏にかかわる個有の時間であらうという想像は比較的容易であ

る。作り物語が継続した歳月を持つているという現象は、驚くべきことであるのだが、事実として認められるものである以上、それは傑出した理想者として描かれる源氏世界にかかわるものであると考えざるをえないものだからである。いまそれを物語そのもので検するならば、源氏を中心にした物語場面では時の経過は具体的な月日の指示で記されるのを基本としているのに対して、源氏が直接表面に出ない挿話場面では、無時間的平板な語り口になっているという現象が指摘できるのである。源氏世界の基本的な語り口を任意の巻によって示すならば次の通りである。(テキストは日本古典全書本による)

- 。人聞きなさけなくやと思し起して野の宮に参り給ふ。九月七日ばかりなれば、二の65_ジ。
- 。十六日桂川にて御祓へし給ふ。二の70_ジ。
- 。院の御なやみ、十月になりては、二の73_ジ。
- 。御四十九日までは、女御御息所たち……みな院につどひ給へりつるを……十二月廿日なれば、二の76_ジ。
- 。年かへりぬれど世の中今めかしきことなくて静かなり 二の77_ジ。
- 。御匣笥殿は二月に尚侍になり給ひぬ。二の77_ジ。
- 。人わろくつれづれに思さるれば、秋の野も見給ひがてら、雲林院に、二の89_ジ。
- 。廿日の月やうやうさし出でて、二の89_ジ。
- 。初時雨いつしかと気色だつに、二の97_ジ。
- 。十一月の朔日ごろ、御国忌なるに、二の98_ジ。
- 。十二月十余日ばかり、中宮の御八講、二の98_ジ。
- 。年もかはりぬれば、内裏わたり花やかに内宴、踏歌など聞き給ふ。二の102_ジ。
- 。司召の頃、この宮の人は、二の104_ジ。

。夏の雨のどかに降りて、二の 106^{ジイ}

これは賢木巻一帖の歳時であるが、月日の経過はおおむね何月何日と具体的な数字で記されており、その間に「初時雨」とか「夏の雨」などの季節感を示す表現によって補完される形になっている。ただ、右の引用例で77^{ジイ}「二月」から89^{ジイ}「秋の野」まで十ページ余り、期間にして春から夏いっぱい、月日の経過が欠落しているのは、丁度この間に源氏が激情を抑えかねて藤壺に迫る場面が語られ、本文では「いかなる折にかありけむ、あさまじうて近づき奉り給へり」(84^{ジイ})と、殊更におぼめかされて語られている箇所である。これは事の性質上、意図的に臈化されたものと考えられるものであるが、その他の場面は満二年余の月日の進行がほぼ正確に辿られている。これは決して賢木巻にのみ独自の記述態度ではなく、桐壺巻を除くすべての源氏世界に共通する現象である。たとえば夕顔巻ならば、

。秋にもなりぬ。一の 250^{ジイ}

。八月十五夜限なき月影 一の 257^{ジイ}

。十七日の月さし出でて 一の 275^{ジイ}

。九月二十日の程にぞおこたり果て給ひて 一の 275^{ジイ}

。伊予の介、十月の朔日の頃下る 一の 278^{ジイ}

とあって、月日の指示が明瞭なのは賢木巻の場合と変らない。ただ、賢木巻は足かけ三年を含み年末年始の記述でもって、おのずから物語世界の連続性が表に出ているのに対して、夕顔巻は単年であって巻に含まれる期間が小さいという事を含め短篇的結構になっているものである。夕顔巻のように、前後に接する巻々が連続していないという点が、若紫巻をも含めて源氏物語の始発部分の短篇的性格の問題になる所であり、その中でも特に若紫巻が末摘花紅葉賀の二帖とからみ合う特殊な構造については、考究すべき課題であるが別稿に譲らざるをえない。

夕顔巻のような短篇的な巻にあっても月日の経過が日付で示されるのに、源氏が直接物語の表面に立たず、源氏以

外の人物で構成される局面では、右に見たような日付けを追って記されるという語り口はほとんど認められないのである。たとえば、蓬生巻の構成は前半が未摘花の貧窮の募っていく有様が細叙され、後半部に源氏に見出されて二条東院への収容が約束されるというように、截然と二分することができるのであるが、源氏が姿を現わさない前半部では、何月何日というような記述は全くなされていない。そこでは無時間的に把握される一般化された印象の叙述が行われているが、それは継続する場面の一駒として扱われてはいない事柄中心の短篇的手法と言えよう。そして、未摘花の叔母大式北の方の継子いじめ的な振舞いが語られたところで、「さる程に、げに世の中にゆるされ給ひて、都に帰り給ふと、天の下のよろこびにて立ち騒ぐ」(242頁)と、源氏の帰京のことが語られて、物語は明石巻末の記事に重ねられていく。源氏が帰京したにもかかわらず思ひ出して貰えない未摘花のより一層の苦境が語られ、絶体絶命のどん底に落ちた段階で、

十一月ばかりになれば、雪霰がちにて、外には消ゆる間もあるを、……つれづれとながめ給ふ。……かの殿には、めづらし人に、いとどもの騒がしき御有様にて、いとやむごとなく思されぬ折々には、わざともえおとづれ給はず、まして、その人はまだ世にやおはすらむとばかり思し出づる折もあれど、たづね給ふべき御志もいそがであり経るに、年かはりぬ。四月ばかりに、花散里を思ひ出で聞え給ひて……二の249頁

と、十一月、正月、四月の月が辿られ、無事に源氏に救出される運びとなる。蓬生巻の後半、物語を主導する力が未摘花の日常から源氏の側に移ったとき、急に月日の記述が現われてくる所に、月日によって示される歳時が、ただ単に場面の日時を表すだけの機能なのではなく、連続した時間の現れとして個有のものであり、源氏世界を描く上での語り口であることを推定させるものである。

このような例は他に多く指摘できる。少女巻では夕霧の元服と大学入学、そして雲井雁との幼い恋の話が日本古典全書(白)の41ページから80ページまで費されているが、その間、日付で示される記述は全くない。ただ「雁の鳴きわたる

声」と「霜のいと白き」という季節感を示す表現があるのみである。そして、年中行事としては五節の舞姫が話題になっているが、このエピソードも源氏が往時の筑紫の五節を思い出して、夕霧の思ふ惟光の娘の五節と源氏の回想の五節とが二重写しになって描かれる場面であって、逆に源氏の場にのみ歳時が明らかにされることの例になっている。少女巻第一年が終り、夕霧の話題から源氏中心の物語に立ち戻って第二年が明けると、月日の記述は急に細かに現れてくるのである。同様の傾向は常夏巻の近江君、真木柱巻の髭黒北の方の挿話にも認められるのであるが、これらの事件はもともと短期間の出来事としてしか扱われていないものであり、日付けの有無は目立つほどのものではないが、話題が源氏の側に復帰すると月日の指示が出てくる点では少女巻の夕霧の例と同じい。

そして、それは玉鬘巻の玉鬘の登場の際にも顕著に認められるものである。少女巻末が六条院の新造なったことを語り、御方々の移転を記したところで急に幕を閉じて、玉鬘巻の「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れ給はず……」と、夕顔への追慕が語られて、夕顔の遺児の後日談へと遡行していく。「この若君四つになる年ぞ、筑紫へは行きける」(二の92^バ)と語られる玉鬘の九州での十数年はあらずじにまとめられて、

。この君の十歳ばかりにもなり給へるさまの、ゆゆしきまでをかしげ、94^バ

。二十ばかりになり給ふままに、生ひ整はりて、いとあたらしくめでたし、96^バ

などと紹介され、大夫の監のあながちなる求婚と九州脱出のエピソードが語られるのであるが、その間

。懸想人は夜に隠れたるをこそ、よばひとはいひけれ、様かへたる春の夕暮なり、98^バ

。大夫の監は、肥後に帰りいきて、四月二十日のほどに、日取りて来むとする程に、かくて逃ぐるなりけり。101^バ

。あやしき市女商人のなかにて、いぶせく世の中を思ひつつ、秋にもなり行くまに、103^バ

などと時候の推移の大略が辿られている。しかして、玉鬘一行が長谷詣の折に右近に再会し、その報告によって源氏が玉鬘を六条院に迎え取ることを考える段階に至って、

。かくいふは、九月のことなりけり。^{122ジ}

。右近が里の五条に、先づ忍び渡し奉りて、人々選り整へ、装束整へなどして、十月にぞ渡り給ふ。^{122ジ}

と、具体的な日付けが現れてくるのである。この「かくいふは、九月のことなりけり」という改まった書きざまは、単にその前にある「秋にもなりいくまきに」を受けて、その実際のな月を示すための役割なのではない。「秋」というだけで十分であった孤立した挿話風な玉鬘の九州脱出の事件が、物語の本流に対してより具体的な位置づけが要請され「九月のことなりけり」と据え直されてきたものと考えられる、さらに「秋にもなりいくまきに」という書き方自体が、玉鬘の九州脱出のエピソードの終局近いことと決して無関係ではありえないのである。つまり玉鬘だけにまつわる挿話であった時には無時間的な梗概風な語り口で済んだものが、六条院の物語の一部にはめ込まれてくるとき、六条院世界の秩序に対するかわり方として、九月のことという指定が必要であったと理解される。換言すれば、ここで「九月」のことという指定が有効性を持つためには、源氏世界が一貫して継続した時の流れを持っていることが前提になるのだ。だから、この部分の表現は、玉鬘巻の冒頭から語られていた夕顔の遺児の後日談の紹介から離れて、六条院の物語に参入したことを意味するものであり、少女巻の巻末の記述態度に直結するものである。少女巻の巻末は、

。八月にぞ、六条の院造りはてて渡り給ふ。三の^{86ジ}

。彼岸の頃はひ渡り給ふ。^{87ジ}

。九月になれば紅葉むらむらと色づきて、^{88ジ}

。大堰の御方は、かう方々の御うつろひ定まりて……神無月になむわたり給ひける。^{89ジ}

と細叙されていた。この細かな月日の経過の中に「かくいふは、九月のことなりけり」でもって玉鬘がまぎれもなく六条院秩序に繰り込まれていくのである。この「九月」が少女巻末の九月と同年か翌年かの認定でもって、新旧年立

の分岐点になることは周知に類するが、月日を明示する語り口が源氏を中心にする物語場面にのみ認められるものであることを考えるならば、作者が少女巻末の場面との接続を無造作に誤ってしまったものとして、少女巻と同年の九月とする新年立は果していかなものであろうか。明石御方をして、わざわざ他の重だった女性の移転が完了した後の冬十月にひっそりと冬の御殿に移した作者が、玉鬘を九州から連れ出した年をうっかりして、未だ全員の移転が完了しない九月に玉鬘の住むべき場所を考慮するという錯覚を犯したと見るよりは、旧年立のように、少女巻末の翌年、玉鬘の住むべき所を四季の町の夏の御殿の西の対に定めたと考える方が穏当ではあるまいか。ここでの問題は、少女巻末で完成した豪壮な六条院を舞台にして、華麗な物語絵巻をくり広げようとしたとき、その華やかな舞台にふさわしい新しい人物を必要としたということであり、玉鬘の出現を待つてはじめて六条院の物語が具体的に動き出すという点にかかっている。

三

夕顔の遺児が九州で成人し、大夫の監の求婚という事件によって急遽上洛して、曲折を経て六条院入りが果されるのであるが、その間、細かな月日の指示がなくて物語場面に源氏が現れてくると月日をはっきりしてくるといふ玉鬘の描かれ方と、ほとんど同様な手続きで物語に現れるのが若菜巻の女三宮である。周知のように若菜上巻は「朱雀院の帝、ありし行幸の後、その頃ほひより、例ならずなやみ渡らせ給ふ」と語りおこされて、朱雀院の出家の志と女三宮の後見に関する話題が展開していく。この朱雀院の婿えらびのことが、朱雀院を軸にした対話を主とする語り口で進行するのであるが、対話体というスタイルの特質はそれとして、その間の出来事がいったい何時のことなのかを全く示すことなく、無時間的に凝集した密度で語られている点、前節で考察した玉鬘の場合に通じ合うものがある。すなわち、朱雀院の婿えらびが源氏にほぼ内定したところで、物語本文は、

年も暮れぬ。朱雀院には、御心地なほおこたる様にもおはしませねば、よろづあわただしく思し立ちて、御裳着のことは思し急ぐさま、来し方行く先あり難げなるまで、いつくしくのしる。四の34^頁

と語られてくる。この「年も暮れぬ」とあるのは、巻頭の「ありし行幸」とあったのを承けるのであるが、藤裏葉巻の六条院行幸とは、「十月の二十日あまりの程に、六条の院に行幸あり」(三の357^頁)とあったものである。この婿えらびの経緯を叙す部分は十月下旬から師走に至る極めて短い期間の出来事としてはめ込まれているものである。

藤裏葉巻までに影も見せなかった朱雀院の女三宮を突如語り出し、その生い立ちを語って婿をさがすという展開、さらに、それを述べる綿々とした密度の濃い文体は、たしかに秋山虔氏が説かれる「方法の転換」と物語の「質の転換」という論点は無視できない問題を孕むものであるのだが、物語を貫く基本的な語り口は、ここにおいても依然として源氏にびったり寄り添っていて、源氏世界に流れる歲月の進行を写し取るところに存していると言わなければならぬのである。右に引いた「年も暮れぬ」と語られてくる場面は、源氏を婿にという院の意向がほぼ固まり、東宮も「親ざまに譲り聞えさせ給はめ」と賛成して、左中弁が院の内意を持って源氏と面談する直後であることに注目したのである。つまり、源氏が物語の表面に出てくると物語は日付けでもって時を刻みはじめるという、前節で考察してきた語り口がここにも歴然と現れているのである。この後、結局は源氏が女三宮の一件を承引してしまい、帰邸した源氏が紫上に打ち明けかねて一夜を過し、翌日紫上に語る場面のあと、

年もかへりぬ。朱雀院には、姫宮、六条の院にうつろひ給はむ御いそぎ、四の43^頁

と、源氏四十歳の新年が語られるのである。この後の物語の進行は、吉岡曠氏が鋭く論じられたように、極めて微細な年立的秩序を追って語られている。それを示せば、

。年もかへりぬ。43^頁

。正月廿三日子の日なるに、左の大將殿の北の方、若菜まゐり給ふ。44^頁

。かくて二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院に渡り給ふ。49_ジ

。院の帝は月のうちに御寺にうつろひ給ひぬ。59_ジ

この語り口は、藤裏葉巻を支配していた月日の経過にそのまま結びつくものである。くどいようだが藤裏葉巻では、

。三月二十日大殿、大宮の御忌日にて、三の338_ジ

。四月朔日ころ、御前の藤の花、いと面白う咲き乱れて、339_ジ

。七日の夕月夜影ほのかなるに、343_ジ

。かくて六条の院の御いそぎは、廿よ日の程なりけり。348_ジ

。十月の二十日あまりの程に、六条の院に行幸あり。357_ジ

藤裏葉巻が夕霧の結婚、明石姫の入内など、それまで懸案となっていた諸事がめでたく落着いて、先帝と今上の行幸を迎えてめでたさの限りが尽されるのが大団円の様相を呈している事実については、私は殊更に異を称えるつもりはない。そして、若菜巻が夕霧の子供や玉鬘の二人の童の件などで、つながり方としてぎくしゃくしている事も事実である。にもかかわらず、それらをもつていわゆる第一部と第二部とが断絶し異質であるということにはならないのだ。藤裏葉巻で四十賀の予告があつて若菜巻が置かれているという事実、そして、この接続が源氏の身辺を流れる時を写すという現象によって、若菜巻は藤裏葉巻をそっくり承ける形によってのみ位置づけが果されるものに外ならないのである。藤裏葉巻の次の文章に注目したい。

明けむ年四十になり給ふ御賀のことを、おほやけよりはじめ奉りて、おほきなる世のいそぎなり。その秋、太上天皇に准ふる御位得給ひて、御封加はり、官爵などみな添ひ給ふ。三の354_ジ

ここに語られる准太上天皇という点にだけ限って言うならば、人臣の域を飛躍した極限の栄位として、これ以上はあ

りえない停滞性を自ら示すものであって、その意味では大団円にふさわしいとも言えよう。しかしながら、同じ文脈の中で四十賀が予告されているのは決して見逃すべきではないと思われる。それは、これまで纏説してきたように、この物語が葵巻以降に綿密に継続し累積する歳月の流れを写し出していたという、極めて具体的な裏づけを持つ「明けむ年四十」なのであって、真に重みのある言葉であるからである。言い換えれば、この記述によって源氏の年齢が逆算されて、細かな数字の是否はともかく、一往は年立表に整理できるような源氏の生活の重みを背景にした四十賀の予告である点に注目したのである。年立表という形に整理できるほど源氏世界の持続的な伸展が捉えられていたということは、いわゆる第一部といえども事件本位で源氏の栄華の実現が第一義のものに据えられていたのではなく、物語展開の契機は内的な源氏世界の変容、つまり源氏の年令的契機に従うものであったと認定せらるべきものである。その限りでは第一部と第二部との間に、根本的な方法的質的な断絶は認めがたいのである。藤裏葉巻がかねてからの縣案であった夕霧、明石姫の婚姻がめでたく語られるという点についても、葵巻と漂標巻で出生が語られた源氏の子女が、いま結婚の適令にまで成長したという事実によって源氏の年令的契機をより鮮明に浮び上らせる効用も考慮しなければならないのだ。先の機会に指摘したように、^{註4}紫上と冷泉院と明石姫はそれぞれ十年の年令差で登場せしめられており、源氏と夕霧は二十歳の差で描かれているというが如く、源氏世界は非常に単純明快な年令の組み合わせによって構成されている。このような明快な組み合わせがあったからこそ、源氏の年令は十二歳元服を語ったあと四十賀まで物語上で説明する必要がなかったのであり、しかも、このような組み合わせで構成される世界の持続的展開が物語のアクチュアリティを保証する機能でもあったのである。だから、明石姫の装着の式を語るとは、それに十年を上積みした冷泉院の年令を暗示し、さらに十年を加えた紫上の年令を示すものなのであり、しかも冷泉院の推定年令はそのまま紫上が源氏に引き取られた満の年数に外ならないのである。藤裏葉巻が夕霧明石姫の婚姻を語るのは、以上の点からもすでに初老に達せんとしている源氏を指し示している。

そこでの問題は、四十賀を迎えようとしている源氏、そして准太上天皇にまでなりのぼった源氏にどのような物語展開がありうるのか、という点にかかってくるであろう。藤裏葉巻そのままの状況設定では新しい展開がありえないことはあまりにも明らかである。准太上天皇の四十賀を描く新しい年がいかにして存在しうるかというのは、一にかかって、源氏の新しい状況に即応する物語局面を作り出すことができるか否かにあると言えるであろう。そこに女三宮の登場が内部的要請として定着するのではなかったらうか。

この物語展開は少女巻から玉鬘巻へという展開に非常によく似ている。少女巻で太政大臣に任ぜられた源氏が六条院を新造するというが如く、これまでの物語世界を一步押し進めた状況で創出した作者は、その六条院の物語を實際に語り出すためには全く新しく玉鬘という昔の愛人の娘を登場せしめて、全く新たな緊張を設定しなければならなかったと目される。それとほとんど同型でもって、太上天皇に准ずる位に即き、不惑初老の年令に達した新しい源氏世界を語り出すためには、新しい人物女三宮を物語に導入することから始めなければならなかったのである。女三宮の婿えらびという若菜巻の発端部の事柄としての唐突さや文体の特殊さは、詮ずるところ新しい緊張関係の設定による新しい局面の提出以外の何物でもない。勿論、そこで新しい緊張として語り出される女三宮が、なぜ女三宮でなければならなかったのか、という点に関しては依然として重要な課題である。これについては後述したい。

四

以上の考察によって、若菜巻発端部における朱雀院を中心にした対話形式による物語展開の構造は、源氏世界に全く新しい人物を押し出してくるための手続きとして採用されたものに考えられるのであり、その語り口の先蹤としては玉鬘の場合を挙げることができるのであった。玉鬘十帖と若菜巻発端部との間に緊密かつ重層的な照応関係があることについては河内山清彦氏に鋭い論考がある。^{註5} いま、氏の説かれるところをわたくしに整理するならば、

1 ともに求婚譚もしくは婿えらびの物語がその構成を支えている。

2 不自然な形で拉致された新女主人公をめぐる妻争いであり、さらに、その女性が光源氏と過去に関係のあった女人のゆかりである点も共通する。これらのゆかりは、源氏物語に遍在する物語を長篇化する方法としてのそれであると同時に、光源氏をその求婚譚に深くかわらせるためのそれでもある。

3 養護者がとくに情愛を傾けて撫育するため、懸想人が簇立し活況を呈するという求婚合戦の端緒も符節を合わせている。

4 この二つの妻争いの物語を構成する婿がねがほとんど相重なっているのも両者の密着性を示している。

これらによって、玉鬘の物語と女三宮の婿えらびの間に密接な構想のかかわりを説かれる河内山氏の把握は明晰秀拔であり深甚な敬意を表さずにはおられない。その点では、若菜巻の初発部の構成と文体的特徴的把握から第一部世界からの質的方法的転換を説かれる秋山虔氏の所説を批判される河内山氏の論理に妥当性を見たい。しかしながら氏はさらに、女三宮の一件は光源氏が受動的に押しつけられたものではなく、源氏自身が選び取ったものであることを力説されて、玉鬘の処理にも共通した読者の意表をつく一種のどんでん返しがある^註と見、秋山氏の「色好みの衰退」「光源氏の弱体化」「六条院の崩解」と捉えらるるものを鋭く批判されて、「女性哀史的発想」に基づくすべての紫上論を痛撃されるのである。前述の通り、私自身、若菜巻の物語の本流は降嫁が内定して新年を迎へるところから始まるものと考え、婿えらびの一件は傍流的挿話と解するゆえに、この発端部分を方法の転換による新しい物語の始発とは考えない点で河内山氏と同じなのであるが、玉鬘の物語と女三宮の事件とが緊密な照応関係にあることと、女三宮の降嫁が源氏世界の衰退の現れであると解く考え方とは、必ずしも矛盾するものではなくむしろ重層しているところに源氏の衰退が顕著に現れるという仕組みがかくされていると解けるもののではないかと考える。問題は玉鬘と女三宮の両事件の照応関係をどう捉えるにかかっているように思われる。たしかに河内山氏が説かれるように、女三宮の

事件の背後には玉鬘の物語の投影が認められ、そのことに源氏物語の独得な長篇性の問題がある。だが、この重層した妻争いの物語という現象から源氏世界の変らざる部分を強調する考え方とは別に、両者が重層することにより変容した源氏像がより鮮明に浮び上るということもまた全否定するわけにはいかないのではあるまいか。

そもそも、女三宮をめぐる解釈についてはこれまででも多くの先覚が論じられたところである。たとえば、石田稷二氏と今井源衛氏との間に交された若菜巻をめぐる論は、^{注7}若菜巻が源氏物語研究の要であることをはっきりさせたという意味で貴重なものであった。両氏の論点を詳細に辿る余裕は今はないのであるが、大雑把に言ってしまえば、女三宮の降嫁が源氏にとって何であつたかの解釈にかかわる二つの立場と言えようかと思う。すなわち、石田氏はそこに色好みとして変らざる理想者光源氏を見、今井氏は朱雀院の錯誤という観点から物語の危機的な予感を捉えられるという具合に、両氏の立論は必ずしも十分に噛み合う底の論争ではなく、むしろ、論者の研究の方法および姿勢の違いが源氏物語の多様性を見事に浮び上らせたという点で研究史上に貴重な足跡を残されたものと私は考える。不変の理想者光源氏と可変的な源氏像という二面は、決してあれかこれかの二者択一を迫るものではない。私は二股膏藥的に安易に両説を折衷してひとりいい子になろうとしているつもりはない。二者択一の問題でないということは、外側から捉えられた理想者像としての源氏が変わらざるものであるのに対して、源氏の持続して描かれる内面として見た場合には、そこには明らかに変容しつつある源氏像が浮き彫りになるという、いうならば視点の問題に外ならないのである。そして、それは源氏が女三宮を自ら選びとったものか、或いは受け身で承諾せざるをえなかったものかという点についても、いずれかに割り切ることが必ずしも出来ないような語られ方になっている事についても言えるのである。

河内山氏は、左中弁が朱雀院の意向を携えて源氏と会ったときの場を取り上げ、そこで源氏は女三宮の降嫁をはつ

きりと辞退しており院もそれを了解したと判断されている。そして、出家した院を源氏が見舞った際、源氏に親代りに夕霧への仲介の勞をとってほしいと願ったものに対して、源氏が逆転的に降嫁を承諾すると解されるのであるが、果していいかなものであろうか。殊更めて私が言うまでもなく、朱雀院を中心にした人々の会話、さらには源氏の応待は非常に含みの多い言い廻しが駆使されている。源氏が左中弁に語る言葉、

心苦しき御事にもあるかな。然はありとも、院の御世の残少しとて、ここにはまたいくばく立ち後れ奉るべしとてか、その御後見の事をば受けとり聞えむ。げに次第をあやまたぬにて、今しばしの程も残りともる限あらば、大方につけては、何れの御子達をも、余所に聞き放ち奉るべきにもあらねど、またかく取り分きて聞きおき奉りてむをば、殊にこそは後見聞えめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなさなりや、四の32〜33頁

と語るものは、たしかに己れの不適格を極めて冷静に判断し、明晰な論理で主張する源氏の心であり、さらに続く科白でもって自分の代りに夕霧を推挙するのであるから、その限りでは河内山氏の説かれる通りであるのだが、この源氏の辞退の弁がそのまま院の断念につながっているか否かは問題である。この源氏の言に対して、

弁は、おぼろげの御定にもあらぬを、かく宜へばいとほしくも口惜しくも思ひて、内々思し立ちにたる様など委しく聞ゆれば、33頁

と、左中弁は院の意向をさらに詳しく源氏に説明するというのであって、左中弁は源氏の拝辞を認めてはいない。朱雀院の内意が左中弁や乳母らの進言を基礎として固まっていくなのであった事情を考えると、左中弁は簡単に引き退れない立場におかれているというべく、おそらくは左中弁が朱雀院の願いについてき口をわめ誇張をも交えて述べたたてであろう想像がなりたつのである。それに対して源氏は、今度は今上帝に奉ることをすすめ、かつての藤壺の前例を持ち出し、女三宮が藤壺のゆかりであることを「いぶかしくは思ひ聞え給ふべし」と地の文で評されるような心の揺れが記されてくるのである。左中弁の語った院の希望について源氏は再び固辞することがなく、逆に宮への好

奇心が誘われるというこの文脈は、源氏は己れの年齢から言つて適當ではないという認識を冷静に持つ一方で、藤壺のゆかりの宮をゆかしく思う心が同時に発動しているということである。それゆえ、ここで退出した左中弁が源氏の意志として対談の前半の辞退の弁を中心に復命したと見るよりも、さらに固辞することのなかった後半によつて得た感触として、十分に脈があるというようなものであったと見られよう。左中弁は源氏の女性問題について独自の先入見を持つものと描かれていた点も見逃せない。これより先、乳母との話で左中弁は、この縁談が整えたとえ紫上だつて女三宮には一目置かなければならぬだろうと語り、

さるは、この世の榮末の世に過ぎて、身に心もとなきことはなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬ事もある、となむ、常に内々のすさびごとにも思し宣はするに、げにこそ己等が見奉るにも然なむおはします。方々につけて御蔭に隠し給ひつる人、皆その人ならず立ち下れる際にはものし給はねど、限ある人どもにて、院の御有様に並ぶべき覚え具したるやおはすめる。それに、同じくは、げに然もおはしまさば、いかに類ひたる御あはひならなむ、四の26^ジ

と、己れの倭少な判断で源氏の意中を忖度している。源氏がかねて、女の問題で世のもどきを負い、わが心にも飽かぬ事もあると語っていたというのは、おそらくはその通りであつただろうと思われる。源氏は薄雲巻でも藤壺の死後に齋宮女御に向つて同様のことを語っているのであるが、それは藤壺や六条御息所のことを指しての後悔の念の表白であつた。左中弁は源氏の嘆息を高貴な女性を望む心と短絡し、それが源氏ほどの人だから内親王を正室に迎えるのがふさわしいとの考えに結びつき、どれほどお似合いなことかと飛躍するのである。左中弁は源氏の真意を計りえていないのであり、それは同時に左中弁程度の男に源氏が秘めた心奥を明すはずもないということでもあつて、左中弁は結局は卑小なる己れを露呈する役割でしかない。このような先入見を持った左中弁が、源氏の一通りの辞退の言をそのまま真にうけて復命し、院もまた速座に断念したという事態は考えがたい。左中弁が源氏と面談したあと、すぐ

に女三宮の裳着の式がとり行われ直後に朱雀院が出家してしまふと語られていること自体、左中弁の持ち帰った源氏の感触によって、院の側で六条院への降嫁を既定のこととした朱雀院の振舞と見るべきものであらう。女三宮の身のふり方が未定なまま、出家を断行するほど朱雀院は意志的な人物とはなっていないからである。

さりとて、源氏が心にもなく社交辞令として形ばかりの辞退をしたというのではない。朱雀院の衰えはそのまま源氏にとつても晩年の間近い事に外ならないという科白は、決して表面的な謙退ではなく、あくまでも実感として語られたものであらう。しかし、その源氏が女三宮に対して藤壺のゆかりとしての好奇心を寄せるのもまた事実である。この二つの心情が一見したところ排反し矛盾するものの如く見えながら、源氏の場合、身の衰え、老いの意識が逆に女三宮の降嫁を諾わせる事に作用するところに独自の問題があるのだ。

五

女三宮の婿えらびをめぐる語られてくる對話形式の展開は、常に含みの多い言葉遣いでくり広げられ、どのようにも受けとれる流動性の中で進行しているのであるが、このようなところに王朝貴族の会話術があったのであらうし、その微妙な含みの中で左中弁や乳母のさかしらな見解をちりばめ、誤解や独断を発条として降嫁のことが実現していくのであった。先に触れる所があったが、降嫁を決める朱雀院の抜き差ししない判断について、今井源衛氏は「錯誤の人」と捉えられたのであった。この「錯誤」なる用語はその後多くの追隨者を出し、今となつては手あかまみれた憾みなぎにしもあらずであるが、発言者今井氏は当該論文の補注において、次のように説かれているのは傾聴に値する^註。

絶対的無条件的な好色者というのは、第二部以降では光源氏自身というより、彼の周囲の人間の、彼に対する規定なのである。その固定観念によって、彼が遇されたことが、この悲劇をもたらしただ一因ともいえる。彼の周囲の人

々と同じような通俗的な見解を、この事件の主たる因として取り上げることが、基本的なものと副次的なものとを混同する所以だと思ふ。

私はこの今井氏の所説に賛同するものであるが、論の展開の上でいま一度、女三宮の降嫁の過程を検討したいと思ふ。

朱雀院が女三宮の後見を求める事情について物語が語る最初は次のようなものである。

姫宮のいとうつくしげにて、若く何心もなき御有様なるを見奉り給ふにも、「見はやし奉り、かつまた片生ならむことをば、見隠し教へ聞えつべからむ人の、後やすらかむにあづけ聞えばや」など聞え給ふ。大人しき御乳母ども召し出でて、御裳着の程の事など宣はするついでに、「六条の大臣の式部卿の親王の女生はし立てけむやうに、この宮をあづかりてはぐくまむ人もがな。ただ人の中にはあり難し。内裏には中宮侍ひ給ふ。次々の女御達とても、いとやむごとなき限りものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうの交いとなかなかならむ。この権中納言の朝臣の一人ありつる程にうちかすめてこそころみるべかりけれ。若けれど、いとさやうざくに、生先たのもしげなる人にこそあめるを」と宣はす。四の23^{パー}

これは病気の朱雀院を夕霧が見舞い、あれこれと昔今を語り合つた場面の直後に、朱雀院がはじめて女三宮の婿のこゝとを口にする所である。夕霧との対話および女房らの夕霧賛美を引きついで語られるものであるだけに、夕霧に触発されたものと見られるものであるが、ここには注目すべきいくつかの重要な問題点が含まれている。その第一は、姫宮が幼く無邪気な人であるから、その欠点を十分に補導できる婿君が望まれているということ、第二に、内親王という尊い身分からも「ただ人の中にはあり難し」という基準がすでに確立していること、そして第三に、具体的な例として、昔、幼い紫君を愛育して理想的な婦人に育てあげた光源氏の前例を規範として、かつての光源氏のような婿君はいないものかと願う心が、そもそもの婿えらびの出発点になっている等である。ここで朱雀院がまず帝の後宮を考

え、次いで夕霧を話題にしているのは、夕霧が若年ながら中納言であるという官位の問題はともかくとして、一にかかって源氏の嫡男として別格に扱い、かつての源氏の面影を伝える夕霧に源氏の前例の再現を期待する心と見る事ができよう。その点で、柏木に対しては「位など今すこしものめかしき程になりなば、などかはとも思ひよりぬべきを、まだ年いと若くて、無下に軽びたる程なり」と、その求婚を一蹴しているのは、「ただ人の中にはあり難し」という最初の選定規準に抵触するがゆえに当然なのである。つまり、夕霧と柏木とは朱雀院の思惑の中ではっきり次元の違う所で意識されている。夕霧が「源氏」だから尊ばれているのではなく、唯一無二の理想者光源氏の子息として自ら別格なのだ。この時の夕霧は「二十にもまだわづかなる程」であるが、源氏が若紫巻で紫君を二条院に引き取ったのが十七歳、葵巻での新枕が二十一歳、いずれにもせよ女三宮のためにかつての紫君と源氏の関係の再現を期待するものとしては、夕霧が最も似つかわしいと考える朱雀院の考えは極めて自然である。しかし、その夕霧は太政大臣の姫と婚姻を結んだばかりという事情によって婿がねとは考えられないというように展開していく。

「中納言は、もとよりいとまめ人にて、年頃もかのわたりに心をかけて、外様に思ひ移るふべくも侍らざりけるに、その思ひかなひては、いとど動く方侍らじ。かの院こそなかなかなほ、いかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は、絶えずものせさせ給ふなれ、その中にもやむごとなき御願深くて、前斎院などをも今に忘れ難くこそ聞え給ふなれ」と申す。「いでその旧りせぬあだけこそは、いと後めたけれ」とは宣はすれど、げにあまたの中にかかづらひて、めざましかるべき思はありとも、なほやがて親ざまに定めたるにて、さもや譲り置き聞えましなど思召すべし。

ここでは、夕霧が「まめ人」であるゆえに所詮は女三宮の婿には不向きであることが論じられているのであって、源氏の子息といえどもかつての源氏と同列でないことが明らかにされている点で注目される部分である。この見解は必ずしも乳母らの独善的な判断ではないのであって、物語を貫いて作者が与えた夕霧像の根本に触れるものと考えられ

る。少女巻で夕霧元服の際に源氏が語る教育論は、それ自体が作者のすぐれた見識を示すものである一方、己れの生い立ちと全く異なる方針によつて夕霧が正統的常識的な人物に成長することを願う源氏の心は、源氏の生涯が源氏にのみ許された特殊な一回限りのものであることをはっきりと自覺している源氏像に外ならないのだ。夕霧が「まめ人」であるのは、葵上の血筋を引くためという理由も勿論考慮されるべきではあるが、源氏の配慮によつて意図的に作り上げられたものと言ふべきものであつて、それはそのまま源氏の超絶性の証しでもある。このことを右に引いた本文について言うならば、夕霧が幼なじみの従姉雲井雁に長年にわたつて恋いこがれて、やつとめでたく結ばれるという一事が、その飛躍のない常識的な手がたさにおいて源氏との違いを最も端的に示す働きを持つのである。ただ単に太政大臣の姫を正妻に迎えたばかりだから婿がねに不適であるというのではなく、そのような状態に疑いもなく安住している夕霧の「まめ人」ぶりに、かつて若かつた時の源氏の再現は期待できかねるのである。

右に引用の乳母と院との対話の場面で、さらに注意したいのは、乳母らが夕霧に対しては極めて妥当な認識を示しているのに——そこに夕霧の解り易さ、常識性の特徴があるわけなのだが——、源氏への理解としては決して十全のものではないという点についてである。たとえば、右の本文で源氏こそ女性をゆかしく思う事の絶えない本当の色好みだと語り、「その中にも、やんごとなき御願深くて、前斎院などをも今に忘れ難くこそ聞え給ふなれ」と、源氏に正妻を望む志の厚いことを主張している。これは先に引いた左中弁の思惑と全く同軌のものと言ふべく、明らかに主観的なさかしらである。このことは降嫁の噂を聞いた紫上の物思いとして、

かかる御定など、かねてもほの聞き給ひけれど、さしもあらじ、前斎院にも懇ろに聞え給ふやうなりしかど、わざとも思しとげずなりにしを、など思して、^{41頁}

と回顧されているように、前斎院朝顔の一件はすでに朝顔巻で決着がついていることは確かであるものの、あたかも現在に尾を引いているかのように乳母らが語っている点に、無責任な噂好きの世間の実体がはしくも露呈せし

められている。いったいに、この物語の作者は世間そのものに対しては決して無視も軽視もしていないにもかかわらず、「世間」を構成している個々の人間の無責任な噂やおせっかいについての批判、場合によっては揶揄そして嫌悪の情を描くことは稀ではない。紫式部日記に流れている対人関係のわずらわしさへの嘆息や、彼女の孤独癖のごときものは、源氏物語においてまぎれもなく、源氏や紫上などの凡俗をはるかに越える人物が決して世人に正當に理解されることなく、いつもさかしらな噂やおせっかいに悩まされるという形で投影されていると考えられる。そして、そのような誤解されるほどの大きさということで理想人物の形質が捉えられていると思われるのであるが、その細かな考察は他日を期さなければならない。

乳母や左中弁などが己れの卑小さを証明するような誤解を交えて賛美する源氏像が、結局は朱雀院をして「その旧りせぬあだけこそは、いと後めたけれ」と危惧の念を挟ませつつも、「なほやがて親ざまに定めたるにて、さもや譲り置き聞えまし」というが如く、「色好み」の源氏の豊かな可能性に托すことになっていくのである。「旧りせぬあだけ」が窮極には源氏の超絶性の証拠に作用している点に注意したい。この前後の朱雀院の源氏賛美には極端なまでのものがあり、今井源衛氏がこれらをもって朱雀院の積年の源氏コンプレックスを論じて、負け馬はコースを外れがちである、と評されたのであったが、けだし名言である。

朱雀院の婿えらびは、「まめ人」の夕霧と「色好み」の源氏とが真正面から対比計量されて、いずれが望ましい婿がねか問われているのであるが、当然のことながら源氏が残る。婿えらびはこの段階ではほぼ最終的な結論が出ているといって決して過言ではないであろう。あとはいかにして源氏を物語の表面に引き出してくるかという手続があるばかりである。このプロセスは、かつて紫君を幼い時から世話をした源氏の例にかんがみ、同じような望ましい後見を女三宮にもと願う朱雀院の親心から始まり、結局は源氏その人を婿にと考えるに至る曲折が語られていると捉えることができる。幼稚であり欠点の多い、しかもそのゆえに鐘愛する姫宮の後見として、源氏のような完全な男性を求

めるとなつたとき、その答えはほとんど自明でさえある。“源氏のような婿”を求めることが、“源氏その人”を婿にと考え及ぶのは、夕霧さえもが不適当となつた時点では、まさに論理の必然であつた。それは作者がこれまで描いてきた超絶者光源氏の朱雀院的な確認に外ならなかつたと言ふべきものである。勿論、言うまでもなく、“源氏のような婿”から“源氏その人”へと旋回する思考に大きな錯誤があり飛躍があることは確かである。俗に言うように、奇蹟は二度おこらないことから言えば、そしてまた、歴史が常に一回限りのものであることから言えば、朱雀院の判断はその間に流れた時間の重みを完全に無視してしまつてゐるゆゑに、最も似つかわしくない相手を選んだことになるわけであるのだが、一方から言えば、源氏に匹敵する男は絶対にいないという事を、この飛躍した判断が何よりもよく証明してゐることになるのだ。

六

これまで考察してきたように、朱雀院の子を思ふ心の闇として源氏のような婿を求めることが、結局は源氏自身に白羽の矢を立てることになる経緯を辿つて、物語に女三宮が押し出されてくることになるのであつた。だがそれは、朱雀院の願ひとして源氏を当事者に巻きこんでくることであつて、表裏する課題としては、その朱雀院の選択を受け入れる源氏の側の必然がいかなるものであつたかが問われるのでなければ片手おちの誇りはまぬかれない。どれほど朱雀院の親心が痛切であろうとも、源氏が一顧だに与えないものならば、この縁談は問題になる余地がない。朱雀院が錯誤ないしは飛躍を含みつつも、それなりの論理の必然として選びとつた源氏を婿にという結論は、一方では、源氏においても女三宮を正妻に迎え入れる何らかの要因が用意されてゐるのでなければ、所詮はこの話は成り立たない。その意味からも女三宮の降嫁は極めて作爲的構想的な事件と言わなければならないのである。そこで再び、今井源衛氏が朱雀院を「錯誤の人」と評したことに立ち戻つて考えよう。朱雀院がそのような結論に達せざるをえなかつ

た道すじは物語の展開で十分に裏づけされているにもかかわらず、その判断が誤りであったのは、光源氏が朱雀院の考えたような偶像の超人ではなかったという事実による。これまで繰り返し述べてきたように、源氏の上に流れる歳月を写し出す語り口が、あたかも日記的時間とでも呼べるような密度と正確さを示している一方で、その物語の流れと全く無関係に朱雀院の判断が挟まれている異質さが、すなわち錯誤を生む基盤なのである。日記的な持続する世界が描かれているということ自体、光源氏が生活のレベルで捉えられている事に外ならず、超人として描き出されているものではない。そして、生活のレベルということは、継続する歳月の中で否応なしに徐々に変容する源氏像の謂でもある。だから、女三宮の登場は朱雀院の痛切な願いにもかかわらず、すでにそのような源氏ではなくなっているがゆえに実現するという、極めて皮肉な現象と捉えられるものである。先にも引用した左中弁に語る源氏の言葉、院の御世の残少しとて、ここには、またいくばく立ち後れ奉るべしとてか、その御後見の事をば受けとり聞えむ。げに次第をあやまたぬにて、今しばしの程も残りともる限あらば……

さらには、朱雀院の出家を見舞った折の言葉、

かたじけなくとも、深き心にて後見聞えさせ侍らむに、おはします御影に変わりは思されじを、ただ行く先短くて、仕うまつりさす事や侍らむと、疑はしき方のみなむ、心苦しく侍るべき。四の40頁³⁶

これらの発言は、四十賀の新年を目前に控えている源氏の科白として、彼の年令的契機の中で読み取られるべきものであり、単なる儀礼的謙辞などではない。これに類する己れの老いを意識する源氏は、すでに第一部においても描かれはじめていたのであって、その流れの中に位置する言葉なのである。たとえば、少女巻で元服し大学に入った夕霧に對して、

人の上にて、かたくななり、と見聞き侍りしを、子のおとなぶるに、親の立ちかはり痴れ行くことは、いくばくならぬ齡ながら、かかる世にこそ侍りけれ。三の49頁³⁷

と抱く感懷は、格別に自覺することでもなかつた「痴れ行く」ことについて、子息の生長によりまざまざ実感せしめられる詠嘆であり、若菜巻の例が朱雀院の老いをそのまま己れの運命であると語るものに共通する源氏の認識の型を示している。勿論、少女巻と若菜巻とは語られる感情の深淺に明瞭な違いがあるが、それとても持続する語り口の中における老いの度合いの深まりの差に外ならない。少女巻前後に記されている源氏の年齢に関する意識は、この他にも数多く認められるのであるが、その中から二三の例を挙げるならば、

。何とはなく翁びたる心地して、世間の事もおぼつかなしや。

常夏三の 191
ヅベ

。やうやうかやうの中に厭はれぬべき齢にもなりにけりや、

同 三の 193
ヅベ

。さかり過ぎたる人は、酔泣きのつひでに忍ばれぬこともこそ。

篝火三の 215
ヅベ

など、何の不安もない榮華の絶頂を享しているかに見える六条院世界に、底深く沈んだ移ろいがひそやかではあるが確実に進行していることを知るのである。右に挙げた常夏篝火の例が、ともに夕霧をはじめとする柏木その他の若者たちの前に出て、源氏が冗談めかして己れの老いを口にする場面であるが、その場とは、夕顔の遺児を引き取り養父と懸想人の間に揺れ動く源氏のあやくな情念が描かれる場でもあった。はるか遠い昔の愛人の娘に心惹かれる源氏と、夕霧や柏木に向つて冗談めかした語調でもって老いを語る源氏とは、まさしく楯の両面であると言えよう。しかも、その夕顔の遺児への懸想のことは、若菜巻において、新年早々に算賀に参上する玉鬘という形によつて改めて話題にされている点に注意したい。

。過ぐる齢も、自らの心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しき有様にて、改むる事もなきを、かかる末々のもよほしになむ、なまはしたなきまで思い知らるる折も侍りける。中納言のいつしかと設けたなるを、こごとしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。人より殊に数へとり給ひける、今日の子の日こそなほうれたけれ。しば

しは老も忘れても侍るべきを。四の46頁

。……かう世を棄つるやうにて明し暮す程に、月日の行方も知らず顔なるを、かう数へ知らせ給へるにつけては、心細くなむ、時々はおもひやまざると、見給ひくらべよかし。四の49頁

など、玉鬘の若菜の祝いに語られる源氏の感懐は、右に挙げた一連の引用と同質で繋るものであることは明らかである。少女巻での詠嘆が夕霧の元服に触発せられたものであったのに対して、これは夕霧もすでに人の子の親であるという状況の展開を含み、さらに、かつて懸想の対象であった玉鬘が四十賀のために二人の童を同伴して訪れたという所に、先に引用した一連のものにくらべて一段深められた詠嘆になっている。というよりも少女巻および玉鬘十帖に描かれた源氏の年令に関する感慨を踏えることによってこそ、ここにおける源氏の詠嘆が真に実感たりうる構造になっているのである。

前述したように、物語の長篇的筋道は、藤裏葉巻の十二月二十余日の六条院行幸から、この新年の玉鬘の若菜の場面に直結していると考えられる。源氏が四十の新年を迎えて第一に語られるのが、外ならぬ玉鬘主宰の賀宴であったというのは極めて意味深いと言わなければならない。それは、玉鬘の若菜の直後に女三宮の六条院降嫁のことがおもむろに語り出されてくるという関連の上においてである。女三宮の降嫁が玉鬘十帖における求婚譚と重層し照応する関係については、先に河内山清彦氏の論を引いて述べたのであるが、玉鬘の事件が完全に過去に葬られたものとして女三宮の降嫁と照応するのではなく、玉鬘の再登場によって、両者は現在の時点で重ね合せられるのである。そして、その間に流れ去った時の重みを実感する詠嘆を背景にして女三宮の登場が果される点が重要なのだ。

玉鬘が新しく物語に語られてくるのは、新造成った六条院世界の新しい緊張として登場が要請されたと目されるのに対して、女三宮の場合は、准太上皇の尊位に即いた源氏世界の新たな緊張という点において、この両者は機能的には同趣のものと一往は理解することが出来るであろう。その意味では、人物の造型は主題性に奉仕せしめられるとい

う森一郎氏の卓説の適合する好例である。しかしそこで最も肝要なことは、それぞれの人物の出現を必要とした主題性なるものがいかなるものかの認定にかかっていると思われる。たしかに、玉鬘女三宮ともに局面の展開に従って突如として物語られてくる例として、まさに同列なのだが、玉鬘の賀宴を含む大きな状況の中で女三宮が語られている以上、この人物造型を機能の面でのみ裁断するわけにはいかないのである。

玉鬘が六条院の丑寅の町の西の対に入るという設定によって、状況としては六条院の四季の構想の一角を担うものであったのに対して、女三宮の場合、六条院南の御殿の寝殿に入るという違いに注目したい。つまり、玉鬘の場合には、六条院四季の町という空間化された場での四季の挑み合いという、唯美化された葛藤の中で——ということは無害化された葛藤ということに外ならなかったのだが——、源氏が昔の愛人の忘れ形見に対して屈折した懸想をするという状況が心理化された緊張でありえたのにくらべると、この女三宮の降嫁は四季の町の規模を必要とはせず、直接に六条院の中核たる南の御殿を舞台とするという極限された問題が提出されてくることになるのである。二条院から二条東院、そして六条院へという具合に、源氏はこれまで己れの住居を拡大することがそのまま宰領する世界の拡大を意味し、その都度、新しい人物の投入によって新しい緊張が醸成されてきたのであった。しかし、女三宮の登場はそのような源氏の支配空間の拡張に結びつくものでなかった点に格別の注意を払わなければならないのだ。准天上天皇の威勢をもってすれば、いま女三宮を新しく迎えるに当って、全く別な新居を造営してもよかったはずであるし、二条院ないしは二条東院を改造して内親王にふさわしい場を提供することはいくらでも可能であったはずである。それにもかかわらず、女三宮の入るべき場は紫上の住む南の御殿の寝殿以外のどこでもなかったという所に、作者の意図した新しい緊張関係がいかなるものであったかを指し示していると言えよう。玉鬘に与えられていた緊張の設定と女三宮のそれとは、決して単なる趣向の類似にとどまるものではなく、明らかに質的に違っていると考えられるのである。その意味から言えば、秋山虔氏が若菜巻を捉えて「質の転換」を説かれたのは、鋭く一面の真実を衝

かれていると言ふべきものである。ただ、その質的な転換が、若菜巻以前の物語世界と断絶した形で果されたものではなく、ということとは「方法の転換」と捉えるわけにはいかないものであつて、藤裏葉巻までの物語世界の全重量がずしりとかかつてきて、そこで一つの飛躍的展開の場に達すると考えられるものである。比喩的に言えば、氷点まで降った水がみる間に結氷していくようなかたちなのだ。氷はすでに水ではないという点では質的な展開と言えようが、しかし全く別のものになった訳のものではないし、何よりも温度そのものの下降がそれを支配する原理になっている。そして、その氷点にも比すべきものが源氏の四十歳という年齢だったのでなからうか。だからこそ、第一部の杵に収まる玉鬘が四十賀に参上する場と、女三宮の降嫁とが同列に並んで若菜巻を構成しえているのだ。

七

継続した物語場面として源氏世界を捉えるとき、源氏の変容は彼の意識の面で明らかに看取されるのであり、源氏はすでに昔のままの源氏ではない。にもかかわらず、朱雀院を頂点とする世人にとっては昔のままの源氏と見做されるという乖離がある。そこで注意したいのは、源氏自身がいかに衰えを意識しようとも、それが源氏をして理想性を剥落させ、ただの人になる道程を意味しているものではなく、源氏は最後まで理想者であり続けるのであり、朱雀院が「旧りせぬあだけ」と評したものと全く異なる意味において源氏は「旧りせぬあだけ」の所有者としてあり続けるのである。つまり、源氏が心を動かす相手について、源氏独自の型を踏んでいるのであつて、決して無差別に懸想するのではないという事情を、朱雀院はその特殊性に気づかず単純に一般化してしか理解していないということなのである。源氏が女三宮の降嫁を承引する直接の引き金になったものは、宮が藤壺のゆかりの君である点にかかつていた。先帝の懇望もだし難く、心弱くもつい承知してしまったといういきさつも絶無とは言えないが、紫のゆかりへの好奇心が源氏を捉えたからこそ、この降嫁は実現したという設定になっている。ここで源氏の生涯を貫いて藤壺に支配さ

れている運命的なものを読み取ることは勿論可能である。だが、女三宮がほとんど唐突と言ってよいくらいに突如として藤壺のもう一人の姪として紹介されてくるものを、藤壺だけの影響力と整理してすべての解決とは言いかねるものがあるのではなからうか。薄雲巻で世を去った藤壺が、いまこのような形で改めて物語現実に力を及ぼす物語としての必然をどう捉えるかこそ目下の急務と思われる。

そもそも、光源氏の世界を構成する人間関係の構図は、花宴巻までに主要人物のすべてが登場していて、葵巻以降に新たに姿を現す女性たちも花宴巻までの世界に深くかわりを持つものとして意味づけられている。たとえば、花散里や筑紫五節が現れるのは葵巻以後であるが、源氏との交渉が持たれた時期は疑いもなく花宴巻以前の青春を色どった女性と推定されるものであり、また、明石君のごときは全く新しい出現でありながら、すでに若紫巻において明石一族をめぐる噂として姿を見せ、その時点で源氏が興味を示すのであった。そして、秋好中宮や玉鬘が死んだ愛人の娘として有意味であることは先に触れた通りである。女三宮が藤壺のゆかりとして登場の契機が与えられてくるのは、このようなパターンに対して例外ではない点に特に注意しなければならないと思われるのである。つまり、秋好中宮や玉鬘がそれぞれ青春の記憶に連る愛人の忘れ形見であったがゆえに懸想の対象になったという明らかな前例を踏えて、女三宮が独自で存在を主張するものではなく、紫のゆかりという背景を背負ってはじめて源氏の心を動かすことが可能であったのである。しかも、花宴巻までの登場女性は、一度源氏の身辺から去って行って後に再び源氏の生活圏に復帰してくるという型を踏む点において共通するものがある。いま、花宴巻までに登場する主要女性の動静を示すならば、

人物

初登場

退場

再登場

朝顔

帚木

賢木

朝顔

空蟬

帚木

空蟬

関屋

六条御息所	夕 顔	賢 木	落 標
(秋好中宮)	葵	賢 木	落 標
夕 顔	夕 顔	夕 顔	玉 鬘
(玉 鬘)	玉 鬘	真木柱	若菜上
末 摘 花	末摘花	蓬 生	
源 典 侍	紅葉賀	葵	朝 顔
朧 月 夜	花 宴	葵	若菜上

花宴巻までに語られる女性で葵巻以降に全く姿を見せないのは軒端萩のみであり、退場と再登場のパターンを踏まない例外は紫上ただ一人である。

このような事実から見ても、光源氏が単なる好色の英雄として興味本位の情事をくりひろげるものと扱われているのではないことが明白である。源氏はむしろストイックと呼びたいほどにはつきりした一つの傾向性をもって描き出されている。右に掲げた人物の動静が、葵・賢木の巻を一つの境にしている事は、桐壺帝の讓位と崩御、そして藤壺の出家、葵上の逝去と紫君の新枕という、激動する源氏身辺の状況とまさに合致する現象であって、物語内の政治状況がそのまま源氏世界の構図の基底部になるものとして、源氏物語の最深部にかかわる問題に連っていると思われるのであるが、そのことについて、今、詳細な検討を加える余裕はない。

ともあれ、それら源氏の身辺から一度は去っていった女性たちが、その後それぞれのあるありようでもって甦えつつくるというのは、これまた、源氏世界が累積する歳月を描く手法を持っていたからこそ可能であったのであり、逆にこのような退場と再登場のパターンを踏える描き方によって、物語内に継続する時間を保ちえたとも言えることなのだ。薄雲巻で前斎宮女御に向って六条御息所を偲び、朝顔巻で昔の恋人朝顔への慕情を復活させ、少女巻で筑紫五節

への回憶を語るといった一連の源氏の情念の発動の契機は、すべて源氏が己れの青春に連る記憶を確かめ、それからいかに遠く隔ってしまったかを詠嘆する現状認識の型を示すものに外ならない。これらの女性達の再登場が恣意的偶然に支配されるものではなく、再登場を要請する事情がその都度働いていることを見逃すことはできない。すなわち、六条御息所や藤壺、そして太政大臣（葵上の父）や桃園式部卿宮（朝顔の父）など、源氏世界の基盤を形成していた大人たちが相次いで世を去っていくという状況——その中で藤壺の死が象徴的なのであるが——に即応して、あたかも失われたものを恢復せんとするかのようになり、それぞれ昔に繋る女性たちへの後向きの情熱が語られてくるのである。再登場してくる女性への、あるいはそのゆかり達への源氏の懸想は、決して実現するものではなく一様にためらい思い返す心理が写されてくるものでしかないのである。そこに源氏の変容が浮き彫りにされるのであるが、それは同時に、冷泉院や夕霧、明石姫など源氏の次の世代の生長が描かれるのに対応している現象であり、源氏を取り巻く二様の变化——去るものと来るもの——が、昔を今にとり戻そうとする後向きの情熱の源泉になっていると言える。そこに源氏独自の「旧りせぬあだけ」の実体がある。朱雀院が源氏の「旧りせぬあだけ」と評したものは、実はこのように繰り返される源氏の往時への回帰の情熱を指し示すものでしかなかったのである。その場合、朱雀院の評言が朝顔君のことから発したものであった所に、院の思惑と源氏自体との喰い違いが鮮かである。つまり、源氏が朝顔への恋慕を復活させるのは、その背後に藤壺の死によって象徴される移ろいが厳然として在り、源氏はしいて昔の恋人への恋情をかき立てたものにすぎなかったものを、朱雀院の側では高貴な女性をゆかしく思う源氏の振舞いとして理解できないギャップが女三宮の登場を促す媒体になっているのであった。女三宮に藤壺の姪という条件が与えられている設定には、このような一連の人物造型の積み重ねがあることに留意したいと思う。

極言すれば、源氏世界を形作っている人物たちは、どのように物語が伸展しようとも、常に花宴巻までの時期にかかわりを持つ女性たちばかりであって、源氏の過去に接触しない主要人物は皆無なのである。この事実が、源氏の

“現在”は、すべて物語上の“過去”に嚴重に規制されているということを意味するものであろう。清水好子氏の綿密周到な考察によって、花宴巻までの物語世界が、どのように深く史実を踏え寄り添って語り出されているかが明らかにされているのだが、その事実と源氏の現在を色どる女性たちはいつも花宴巻までの世界に根ざすものであるという現象とは、おそらくは根本において一致するものと思われる。そして、それは物語のリァリティの創出に関係する最も重要な課題と考えられるのであるが、その細かなことは想を改めて他日を期さなければならない。

八

前節で見てきたように、源氏世界の登場人物は、退場と再登場のパターンを踏んで語り出されるものであり、女三宮が藤壺のゆかりであるのは、まさにその型の上で理解されるべきものであった。だがその場合、女三宮が藤壺への追慕の新たな復活とだけ整理し、源氏がいかに藤壺の亡霊に深く支配されていたかという面のみを強調するのは必ずしも妥当ではない。女三宮の婿えらびが若紫君の前例の再現を願う朱雀院の心から出発していること、および、女三宮が紫上の住む六条院南の御殿の寢殿に入るものという二点によって、女三宮が紫上と直接にからみ合う状況がことさらに作り上げられていることを見逃すわけにはいかないのである。これは、藤壺のゆかりという女三宮に与えられている基本設定は、まさに若紫君そのものの再現として把握されるべきものなのではあるまいか。「紫のゆかり」がストリートに藤壺を指し示すのではなく、紫のゆかりとしての紫君の再現としての女三宮という関係、あるいは、藤壺の姪という血筋が紫君の再来として覆い被さっていく関係、として把握できるのではなからうか。つまり、紫上の外にもう一人の紫のゆかりが並び立つところに意味があると考えるのである。前節で、朱雀院の思惑と源氏の実際との間に乖離している「旧りせぬあだけ」を考えたのであったが、それをこの「紫のゆかり」に当てはめるならば、朱雀院は若紫の前例を思い、二度起るはずのない奇蹟の再現を源氏に期待したとき、源氏は藤壺のゆかりとして共に生

きた紫上との半生を、女三宮というもう一人のゆかりによつて再生させたい意志に結びつきたいという、それぞれの異なる願いの交錯する所に女三宮降嫁が位置していると捉えられるのではなからうか。

そして、女三宮が源氏の新しい可能性を担うものとして登場せしめられたものでないことは、これ以前に語られている秋好中宮・朝顔君・筑紫五節・玉鬘などへの一連の源氏の心の揺れとの関連で見るとき、ほとんど自明であると言つても過言ではない。それは降嫁後の源氏のほろ苦い独想の場面で明らかである。

昔の心ならましかば、うたて心おとりせましを、今は世の中を、皆さまさまに思ひなだらめて、とあるもかかるも、實際なる事は難きものなりけり、とりどりにこそ多うはありけれ、余所の思は、いとあらまほしき程なりかし、と思すに、さし並び目かれず見奉り給へる年頃よりも、対の上の御有様ぞなほあり難く、われながらもおふしたてけりと思す。一夜の程あしたの間も恋しくおぼつかなく、いとどしき御志のまさるを、などかく覺ゆらむと、ゆゆしきまでなむ、 四の59ページ

この物思いの第一の特徴は、源氏が「昔の心ならましかば……」と反実仮想し、「今は世の中を……思いなだらめて」というが如く、昔に変わる今の心境を語っている点にある。昔のままの源氏だったならば、女三宮に我慢ができなかったはずなのであるが、それはそのまま、昔の源氏ならばこのような降嫁を肯んずるはずがないという事実の反面なのである。同種の悔恨は降嫁直後、紫上の嘆きをほの見て、「などで、よろづの事ありとも、また人をば並べてみるべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわがおこたりに、かかることも出でくるぞかし」(51ページ)と、「われながらつらく思ひ続けらるる」源氏の心が語られている。つまり、「あだあだしく心弱く」なった源氏とは、昔のままの源氏でなくなっている彼に外ならず、それが通常の意味での色好みでないことは贅言を加えるまでもない。しかも、そのような「おこたりの結果として、女三宮との対比を通して紫上がいかに望ましい女人であるかが、源氏の不吉なまでに高揚する情愛が語られるのである。ここで注意したいのは、同じ藤壺のゆかりであり、加えてかつて紫君の新

枕の年齢にはぼ同じい女三宮を迎えることによって、その外形的な類似にもかかわらず、というよりもそのことによって逆に、二人の紫のゆかりの内質の決定的な違いが明らかにされてくる構造についてである。右に掲げた場面の直前に、女三宮の言うかいのない幼稚さが外ならぬ朱雀院の人柄およびその教育方針の至らなさとして批判する源氏の心が叙せられていて、それにひきくらべ「さし並び目かれず見奉り給へる年頃」よりもさらに痛切に紫上がいとしくなり、「われながらおふしたてけり」の自賛に連るのである。源氏は紫君の再来としての女三宮を六条院に迎えることによつて、これまでの紫上との生活をトータルに反芻しているのだ。紫上が明確に客体化されて、その優越性が改めて確認されてくると言い直してもよいであろう。しかも、その場合、女三宮の至らなさは朱雀院の持つ脆弱な部分をそのまま引き継いでいるものであったのに対して、紫上の優越性とは、源氏の理想性のすべての反映、源氏世界の結晶として源氏自身の全人生への自負であり自賛に外ならない。だから、女三宮の降嫁は紫上の理想性を再確認させ、あわせて、そのような紫上を育てあげた源氏の絶対者としての博大さを描くために作爲されたものと見ることもたしかに可能ではある。だが、女三宮の六条院介入は決して源氏および紫上の勝利を意味するものでないとは、右に引いた源氏の悔恨が雄弁に物語っている。明石君や朝顔君に心を動かす源氏に対して紫上が嘆き、それが紫上へのいとしさになって立ち戻っていく源氏の情念の動きは、たしかにこれまでも繰り返し物語られるところではあった。しかしながら、後述するようにそれらの場合は、紫上の優位は終始揺がないという大きな前提の中でくり広げられる一種の心理ゲームの如きものであったのに較べるならば、女三宮の件について紫上はひそかに、

かく壺より出で来にたるやうなることにて、のがれ給ふ方なきを、憎げにも聞えなさじ、……おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかるべき方なきものから、をこがましく思ひ結ばほるさま、世の人に漏り聞えじ、

四の43ページ

と、独り思うことで明らかなように、紫上はこれまでの例に違えて嫉妬の情は現さないのである。ということとは、こ

れまでの心理ゲームに等しい源氏の懸想と女三宮のことが次元を異にするものであることを紫上が正確に察知しているからである。これまでの事がすべて源氏のわたくしの懸想であつたのに対して、女三宮のことは先帝の意志がかわつてゐる点ですでに源氏個人の枠を越え、紫上の嫉妬の有効な範囲を逸脱しているといふことである。紫上は己れの身のはかなさを思はずにはいられないという意味では、まぎれもなく「女性哀史」と言ひうるものであろう。

にもかかわらず、そこで格別に注意したいのは、紫上が嫉妬することさえも自らに禁じたような強力な競争相手の出現が、必ずしも紫上の全否定には繋つてはいない点についてである。朱雀院は女三宮を源氏に托す際に、いとも簡単に紫上の存在を無視しないしは軽視した一方では、降嫁の後にわざわざ親書を送つて姫宮への配慮を懇請しているという矛盾にも似た扱いがそれに対応している。朱雀院が本当に紫上を無視していたのなら、紫上に文を遣すこともなかったであらうし、女三宮が紫上を乗り越える真の競争者として送り込まれたものであつたならば、院のそのような心遣いなどはあるはずもない。そしてまた、女三宮の降嫁によつて紫上が微動だにしない確固とした場を持つものであつたならば、降嫁自体が最初からありうべくもないというように、女三宮と紫上の関係は実に微妙なものがあるのである。この両者が致命的に対立する関係にはないことは注目に価する。それについて、源氏が両者の融和を願ひ、紫上がそれに十分に応える聡明さを備え、さらにに女三宮が殊更に幼ないという事情によつて、敵対者にはなりえなかつた事情を想定することは勿論正当であるのだが、そのような状態を成り立たせている最も根源的な関係として、女三宮は紫上を規範として再生産されるべく登場の契機を持った人物という設定が考えられるのではあるまいか。事実に見えて言へば、共に藤壺の姪という血縁関係の設定が、どうしても敵対者という同一次元での争ひには展開させないのだ。たとえば、若菜巻の両者の対面の場合は次のように描かれている。

いと幼げにのみ見え給へば、心やすく、おとなおとなしく、親めきたるさまに、昔の御筋をも尋ね聞え給ふ。中納言の乳母といふ召し出でて、「同じかざしを尋ね聞ゆれば、かたじけなけれど、わかぬさまに聞えさすれど、つ

いであく待りつるを、今よりは疎からず……… 72頁

このように紫上が「親めきたるさま」に振舞うことのできるのも、両者の年齢が親子ほどに開いている事実もさることながら、従姉妹どうしであるという血縁のしからしむる所と言えよう。そして、内親王という貴い身の程で六条院の正室に降嫁した女三宮に、紫上が挨拶に参上するこの場面においてさえ、一面において紫上の優位が保たれているのは、その血縁関係の上に親めいて振舞うことのできる年齢の差に外ならない。平俗に言い直せば、それは貫禄の違いということであり、その紫上の貫禄こそが朱雀院の手本と仰いだものに外ならなかったのである。女三宮は紫上の影のごとき存在なのだ。もう一人の紫のゆかりが現れることによって、元来の紫のゆかりがこよなく明らかになってくる仕掛けである。紫上が先行していない限り女三宮の登場はありえないという密着した関係をここに見るのである。

九

これまで考察を進めてきたように、女三宮の降嫁は紫上の幸せを再現させたい朱雀院の願いと、紫のゆかりをゆかしがる源氏の回顧的姿勢の交錯するところで実現したものであった。そして、若菜巻以前の源氏世界は、新しい人物による新しい局面の展開が、二条院から二条東院、そして六条院へというが如くに、空間的拡大と歩調を合せるものであったのに対して、女三宮の登場にあつては、紫上の住む南の町に入るといふ極限された状況が創り出されるのであった。それは二人の紫のゆかりとして、じかに重ね合せられる所に意味があつたと考えられるものであり、女三宮は紫上の虚像の如きものである。しかし、女三宮によって紫上の理想性がどのように輝きを増そうとも、それが紫上自身の幸福を意味するものでないことは言うまでもない。対の上として一步退くことによってのみ顕現される優位性であることが、それを何よりも明らかに物語っている。つまり、紫上はあくまでも源氏世界の女主人であり続け

るにもかかわらず、世間の認める正室は女三宮であるという分裂がここに露呈されてくるのである。それゆえ、女三宮の降嫁の問題は、それに至る朱雀院・源氏の側の必然とは別に、この事態に関するもう一人の当事者である紫上にとつて何であつたかが当然問われなければならない課題なのである。たとえば、女三宮を訪れようとして心の準備をする紫上を描いて、

対には、かく出でたちなどし給ふものから、われより上の人やはあるべき、身の程なるものはかなきさまを、見え置き奉りたるばかりこそあらめ、など思ひ続けられて、うちながめ給ふ。四の70^下

と物思ふ心中が叙せられている。このように己れの身の程を回想してくるような紫上の境遇を作者が一貫して語り続けていたからこそ、女三宮の登場が易々と行われたのであり、しかも、母女御を早く喪つて心もとない姫宮の狀態が、かつての紫君に通ずるものがあつたから、その前例に倣つたというように、紫上のはかない境遇がこの降嫁のきめ手になつていゝと言つても過言ではないのである。新しく女三宮を投入してくるために、作者は紫上像の根本を何一つ改変してはいない。これまで繰り返し述べてきたように、若菜巻の源氏世界は、玉鬘の若菜奉呈によつて代表される旧来の世界構造の中に、たった一人、女三宮が加わるだけで物語の様態が激変するところに特徴があるのであつたが、重々しい後楯を持った高貴な姫が登場したならば、ひとたまりもなく圧倒されてしまふであらう紫上像は、若菜巻で急造されたものでは決してなく、それ以前に既に十分に胚胎していた要素なのである。

第一部の紫上については、夙に松尾聡氏の重要な立論がある。^{註11}氏は第一部の紫上が一貫した女主人公であり理想的な女性であるとする考えに疑念を持たれ、

若し末摘花巻以後に於ても紫上なる女性が女主人公であり而も作者の理想とする女性であるなら、其女性に対する作者の描写は他の女性群像を描くに超えて、筆に於ては遙かに精細に、意欲に於ては遙かに情熱的であるべきが自然ではなからうか。然し乍ら事實は必ずしもさうではない。……中略……即紫上が女主人公である事は、紫上が

主人公源氏の第一夫人たる事により、又主人公源氏が凡ての女を超えて尊重してゐる事により説明せられてはゐるが、それは飽くまで筋の上での女主人公である事を納得させるに止まり、物語としての女主人公である事を納得させるに足る描写は若菜巻以下に至つて始めて見出せるに止まるといふべきではなからうか。

この松尾氏の提言とはば重なる見解が阿部秋生氏にもある。^{註12}すなわち、

紫の上が、第一部で既に女主人公であつたと認めることは、物語の展開からみると無理なことのやうに思はれる。

中略……こうしたことになる一つの理由は、第一部の物語の構造が、事件から事件へと展開することを性格としてゐるものだからである。その事件の展開の間に隠顯する人物の感情や心理の變は、随分こまかに描写されてゐるといつていいであらうが、しかもなほ第一部の物語の性格は事件の展開を軸としてゐるところにある。従つて、事件

——即ち反日常的な生活の中心に立つのは、主人公と藤壺の宮・六条御息所・明石の君・權斎院・夕顔・空蟬・末摘花・玉鬘などで、日常的な生活を共にしてゐる紫の上ではないのだ、といつていいのであらう。

そして又、秋山虔氏も前記松尾論文の視点を引きついで、初期の紫上が「年月の流れを内面化して成長發展する人間像」ではありえなかつたことを説かれてゐるのである。^{註13}これらすぐれた先覚が一致して第一部の紫上が主人公として

の實質を備えていないと論じられてゐるのであるが、この紫上論は単に紫上だけの問題ではなく、必然的に三部構想の重要な論拠になるゆえに事は重大である。すなわち、女主人公紫上の描き方において、第一部と第二部との間にはつきりした變化が認められると捉えるとき、実体を伴わない第一部の紫上の描き方こそ、第一部が古物語のレベルに留つてゐる何よりの証左であると解くことになるのは必至であつた。事実、松尾氏の立論は、戦後間もない時期にあつて、それまでの因襲的な源氏理解を打破した記念碑的論文であり、直後に訪れる成立過程の論の先導的役割を果したものであつたし、阿部氏は人も知る三部構造説の鼻祖であられた。そして、そのような理解において秋山虔氏の若菜巻論が「質の転換」「方法の転換」を論じられる必然もあつたのである。

第一部の紫上が理想的な女人として観念的に作り上げられているという点については、私もほぼ同感しうるのであるが、そのことがただちに第一部世界が物語として幼稚単純であることに短絡できるかどうかとなったとき、私は従来の三部構想説に対して疑念を捨てきれない。当面する紫上の問題に限って言えば、第一部の紫上が観念的にしか捉えられていないとしても、理想的な妻という「観念」が成り立っていることは、実は大変なことと言うべきなのではあるまいか。「観念」なるものが砂上樓閣を意味するものではなく、必ず対応する現実から抽出されてくるものであることを考えるとき、「観念的」という言い方が貶辭として有効性を持つてくるのは、やはり十九世紀以降の写実主義の文学論を経てからなのではあるまいか。たとえどのように夢のような超現実的な事柄が語られようとも、その底には必ず対応する現実がひそんでいる。たとえば、竹取物語のかぐや姫がこの世の人ではない伝奇の世界を現出して、そこに托された古代人の夢は紛れもない現実に根ざすものである。だから、紫上がただ単に理想的な妻として説明的に扱われていようとも、そこでの問題は源氏がどのような基盤において紫上を「理想的」と認定しているのかにかかると考えられ、描き出される「観念」がどのような現実とのかかわり方をしているかにあるのではなからうか。

紫上が物語に押し出されてくる背景は、必ずしも単純素朴なものではない。作者は、光源氏の元服に際しては左大臣家の婿という背景を与えて、母方の後見を全く持たない源氏が宮廷社会の場に伍していける条件を作り上げたのであった。内親王を母とする左大臣の姫君葵上が最も望ましい女性として光源氏の北の方に据えられるというのは、当時の社会通念として妥当なものと言うべきものである。紫君の登場は、まさにその常識的価値観を越えるものとして意味づけられてくるのだ。雨夜の品定めを含めて帯木三帖の物語は、葵上をさし置いて望ましい生涯の伴侶たるべき女の条件が模索されている。紫上が葵上を越えるものとして語り出されている点に格別の注意を払わなければならないのである。葵巻で葵上が世を去った後に紫君は新枕が語られて、事実の上で源氏世界の女主人となるのである。

が、その紫君を賢木巻の草子地は「物語に、ことさらに作り出でたるやうなる御有様なり」(二の79頁)と語っている。この草子地について秋山虔氏が、

これは、紫上の幸いが「物語に、ことさらに……」とことわらねばならない程に、いま進行する物語の現実の中では異様であり、不調和であることがことわられていることにはかならないであろう。あるいは、事柄が物語世界の現実から異質的に浮き上った異例さのゆえに、かかる附言によってことさらにそのことに現実性を与えるべくてこれをし、これが合理化されようとしているのだともいえる。

と説かれたのは^{注14}さすが傾聴すべき卓見である。丸裸の孤児として宮廷社会から隔絶した所に置かれている紫君が、理想者光源氏の最愛の人として睦み合っていること、それもひそやかに日蔭の人と扱われるのではなく、源氏世界の唯一人の女主人に据えられることがいかに破格であったか、秋山氏が説かれるように、「物語にことさらに……」といううやなでこれを加えなければ非現実のそしりをまぬかれないほどに異例であったということなのである。ただ、そこで注意したいことは、「物語にことさらに……」と語り出でたる御有様なり」と語る草子地が窮極に言いたいことは、紫君の幸せもさることながら、光源氏の理想性に外ならないのであって、身寄りのない紫君を女主人に守りかしている源氏への賛美である点についてである。源氏以外の男には望むべくもない状態が作り出されているのだ。つまり、それは衆目の一致する高貴な葵上を愛せずに、葵上とはまさに対極に位置する紫君を愛さずにはおられない光源氏ということなのであって、自らの価値観によって行動を選択する自由人と描かれてくるがゆえに光源氏が理想者たりえる構造なのである。しかも、作者は、源氏が紫君を選んだことについて、物語に殊更に作り出したような説明するだけで能事終われりとしているのではない。紫君が物語上に定着させられてくるためには、葵上が六条御息所の生霊によってとり殺され、御息所もまた身を恥じて伊勢に下り、朝顔君も斎院に入るといった激しく揺れ動く状態を踏えて紫君が語られてくるのであって、作者は紫君を描くのここの上ないほど細心である。極端に言ってしまうと、

紫君を圧倒するような高貴な女性がみんな源氏の身边を去ったあとにただ一人紫君が残る仕組みになっている。そのように、ほとんど作爲的に紫君のみが残された状況の上に、それを説明して物語の中でしか描かれないような破格な男女の仲らいであるとなぜわざ断る念の入れようなのである。作者がいろいろな配慮をちりばめなければ物語に定着しないほど弱い立場であつたということ、というよりも、作者は紫上をして何の頼り所も持たない存在として語ることが明瞭に意図していると言わねばならないのであつて、そのことこそが觀念として紫上に理想的な妻のイメージを与えていたことの結果なのではなかったか。

紫上が第一部において具体的な形象を持つてはいないというのは、一つには、現実は何の力も持たない境遇の下で描かれていることに由来すると思われ、さらに考えられるもう一つの理由は、紫君が女主人、正妻格に据えられたとき、すでに源氏の日常生活の分担者たらざるをえないのであつて、正妻格の女人に反日常性を求めること自体が矛盾と言わなければならないということなのである。葵上の生前は源氏の外歩きのはなやかな場面の中で、物語の底流として見えかくれに断続的に触れられてきて、事件の主役に立つ時がほかならぬ死の場面であつたことを思ひ起した。反日常的生活が日常性の側面としてのみあることは明らかである。もし第一部の源氏世界が日常性の軸を持たない反日常的な事件だけで描かれているものならば、物語の各帖は伊勢物語の各章段の如き孤立性、ないしは好色一代男の短篇性でもって接続せざるをえなくなるであらう。しかるに、第一部といえども源氏の上に流れる歳月は日記的な正確さで写し出されている事はくり返し述べてきたところである。その累積する時間こそ、光源氏の日常性生活性に外ならないと考えられるものであり、すなわち紫君を女主人にする世界と認定されるのである。「年もかへりぬ」のごとき年末年始のけじめを明記して歳月の経過を辿る語り口が、葵巻から始まっていることは決して偶然とは信じられない。葵巻は冷泉院が東宮になり、紫君の新枕が語られるというが如くに、ここではじめて源氏は完全に自前の世界を獲得してくる巻だからである。

葵上が事件の主役——反日常的な場面——としてクローズアップされるのが、外ならぬ逝去の場面であつたという事情にまさしく対応して、紫上が具体的に描かれはじめるのが若菜巻からであつたのだ。それは物語の方法の転換ないしは作者の世界観の変改にかかわるものではなく、紫上を越えて六条院世界に正室が登場するという状況そのものに由来すると言わなければならないのである。紫上は葵上を越えて女主人に据えられ、女三宮に越えられることによってさらに輝きを増すというが如く、重い背景を担う正室に挟まれて明暗が描き出されているのが特徴的なのである。確固不拔の座を占めていた紫上が女三宮の出現によって急転して苦杯を喫するというのではなく、身寄りのない紫君が源氏世界の女主人として遇されることが、そもそも物語の中にしかありえないような破格な扱いであつたのだし、だからこそ、紫上を越えて女三宮が登場したときの紫上が問題になるのだ。

十

第一部における紫君が若菜巻において、源氏に発見され盗み出される幼い主役を演じたのち、物語の表面に事件の中心としてクローズアップされることがないのは事実であるのだが、それをもって紫君を具体的な形質の伴わない人形にすぎないと言ふわけにはいかないのである。これまで述べてきたように、宮廷社会に何の保証も持たない紫君が、光源氏の最愛の人であり続けるところに最も積極的な物語的意味があると考えられるのである。紫君は決して不拔の安定の中にぬくぬくと安住しているのではない。高貴な女人が現れたら速座にも揺いでしまうにちがいない不安定な境遇であり続けている。彼女が非常に敏感に源氏の心の動きに反応を示し、すばやく嫉妬するものと描かれてくるところにも、紫君の置かれた位境の一端が窺えるのである。もっとも、紫君が嫉妬できるのは常にライバルに対して己れの優位を確かめることであつて、女三宮のような場合にあつては嫉妬することさえも自らに禁じてしまうのであつた。第一部に描かれる事件の中で紫君が嫉妬できなかった例として朝顔巻における前斎院の事件がある。

朝顔巻については、秋山虔氏の高名な論考「紫上の変貌」がある。氏はそこで藤壺の死のもたらす意味の大きさを問題にされて、その形代としてのみ存在していた紫上がここに至ってはつきりと据え直されてくる、と論じられ「紫上の不安な位地を確認するそのことが、紫上の、物語の世界における据え直しの作業にはかならなかった」、そして「紫上をあれほど全的にゆさぶり悩ませた権宮への光のあこがれ心が、これもけつきよくは紫上との関係の結び直しとして落着いてくるかたちを見ることができると説かれている。この秋山氏の説かれるところは実に明晰であり、大筋において賛同を惜しむものではないのだが、氏の「紫上の初期について」がそうであったように、第一部における源氏と紫上との関係については、基本的には源氏が世俗に背を向ける姿勢でのみ存在しているものと把握されるのであって、それがひいては第一部と第二部との質的方法的な断層と展開される論理である点、私にはいま一つ納得できかねるものがある。朝顔巻における紫上の不安は、極言すれば若紫巻での登場のはじめから、本質的に紫上像を規定していたものと思われるものであり、それは結局は若葉巻を経て晩年まで変らざるものと言えよう。朝顔に心を分けた源氏が再び紫上への愛しさを確めてくる展開の上では、紫上の据え直しと言いうるものであるが、肉親の縁うすい境遇は何ら本質的に変改されていなかったのであって、ここでの問題は、朝顔君の再登場によってこれほどまでに動揺しなければならぬ紫上の脆弱な基盤そのものと見られるのではあるまいか。葵巻に描かれ賢木巻で斎院に入る朝顔君は、もし斎院に入ることなく源氏の生活圏に留ったとしたならば、紫上のありようは変っていたかもしれないのだ。勿論、物語に語られる上で、葵巻の時点ですでに六条御息所の苦悩を己が戒めとして源氏に靡くまいと心に決めるものと描かれているのであるから、右のようにもし留っていたらという推量は無意味なことではある。にもかかわらず、作者が紫君を源氏世界の中心に据えてくる展開の上で、上の品の女性の総退場という状況を作り出したという事実は、上の品の女性と両立させて紫君を語ることを作者は避けたということに外ならないであろう。そこには厳然として身分社会である宮廷の秩序が張りめぐらされている。ということは、上の品の朝顔君は紫君にとって最初

から最後まで無視できない強力なライバルなのであって、「身の程」が直接に問題になっているのである。

朝顔に懸想ばむ源氏に対して紫君の物思いは次のように描かれている。

1 同筋にはものし給へど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞え給ふを、御心移りなばはしたなくもあべいかな、年頃の御もてなしなどは、立ち並ぶ方なく、さすがにならひて、人に押し消たれむこと、など、人知れず思し歎かる。かきたへ名残なきさまにはもてなし給はずとも、いとものはかなきさまにて、見馴れ給へる年頃の睦び、あなづらはしき方にこそあらめ、など、さまさまに思ひ乱れ給ふに、よろしき事こそ、うち怨じなど憎からず聞え給へ、まめやかにつらしと思せば、色にも出し給はず 三の26頁

2 「馴れ行くこそげに憂きこと多かりけれ」とばかりにて、うち背き臥し給へるは……かかりける事もありける世を、うらもなく過しけるよ、と思ひ続けて臥し給へり。27頁

ここに語られている紫君の心中は、良く知られているように、若菜巻で女三宮を迎える場面の紫上の心中にそっくり適合している。いまそれを抜き出せば、

1 紫の上も、かかる御定など、かねてもほの聞き給ひけれど、さしもあらじ、前斎院にも懇ろに聞え給ふやうなりしかど、わざとも思しとげずにしを、など思して、然る事もやある、とも問ひ聞え給はず、 四の41頁

2 心の中にも、かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれ給ふ方なきを、憎げにも聞えなさじ、わが心にはばかり給ひ、いさむることに従ひ給ふべき、おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかるべき方なきものから、をこがましく思ひ結ほほるさま、世の人に漏り聞えじ、 四の43頁

3 めに近くうつればかはる世の中を行くすゑとほくたのみけるかな 71頁

4 対には、かく出でたちなどし給ふものから、われより上の人やはあるべき、身の程なるものはかなきさまを、見え置き奉りたるばかりこそあらめ、など思ひ続けられて、うちながめ給ふ。手習などするにも、自ら古言も、物思

はしき筋のみ書かるるを、さらばわが身には思ふ事ありけり、と自らぞ思し知らるる、 四の70頁

朝顔12は、若菜1234にそっくり引き継がれている。なかんずく、右の若菜1の如く、紫上が朝顔君の事件を回想して降嫁の噂を自らの心に打ち消す心の動きは、この両帖の出来事が互いに決して無関係なものではなく、一つの類縁関係にあることを意味している。紫上が類似の事件としてすぐ朝顔の一件が思い起されているということ、そして前述したように、左中弁や朱雀院によって朝顔のことが話題になっていることなど、朝顔巻と若菜巻との関係の深さを窺わせるのに十分なものがある。誤解のないようにつけ加えたいのだが、私はここで女三宮降嫁の伏線として朝顔巻が置かれているなどと言おうとしているのではない。無視できない身分の女性が現れたらどんなにかはしたないことになるかと深く怖れる紫上、そして、そのような場に直面しては嫉妬さえも表に出すことのできない紫上の描かれ方が朝顔巻に先行することによって、若菜巻の危機的な状況がより生きてくるという関係に注意したいのである。つまり、朝顔巻の時点で女三宮の降嫁という特定の構想を用意していたかどうかは全く問う所ではなく、後にあって女三宮の降嫁の如き展開があっても少しも不思議でないような紫上の描かれ方になっていることを見逃すわけにはいかないとということである。

その場合、朝顔巻が現れて紫上が大きく動揺することは事実であるのだが、この朝顔巻で紫上の置かれていた状態は必ずしも最悪というほどのものではなかったという、もう一方の事情に注意を向けたい。それは松風巻で明石君の生んだ姫君を引き取って愛育する紫上という状況設定が先行している点である。明石巻から潞標・松風巻と、明石君の出現に対して激しく心動かす紫上が描かれるのがあるが、前述したように、明石君には紫上を決定的に圧倒する力が与えられていないことにより、姫の輝しい未来のために紫上に差し出すことで和解が成り立つのであった。紫君が「上」の称呼を伴って語られるのが薄雲巻であるのは、后がねの姫の親という実質を持つてはじめて可能であったと言えよう。藤壺の薨去と紫の「上」が同帖に重ねられてくるのは決して偶然の一致とは考えられない。

いま、藤壺の薨去を物語局面の展舒の上から言うならば、太政大臣や桃園式部卿の薨去など一連の世代交替の現象のピークに位置するものであることは勿論として、それを源氏世界により密着させて作爲的に言うならば、冷泉院の即位が実現し、かつ、藤壺が源氏と計って冷泉院の後宮に前斎宮（六条御息所女）を入内させて、冷泉院の治世＝源氏の栄華の構図を確立させて藤壺が退場するということなのである。しかも、冷泉院の即位に重なるように明石君の姫の誕生が語られ、宿曜の開示によって姫の宿運のめでたさが明らかにされている。その将来のゆえに品劣れる実母の手を離れて紫君に引き取られるという展開に連るのであって、新帝と后がねの姫という二段構えに構築される射程の長い源氏の栄華である。この展開は、葵巻において藤壺所生の若宮が新東宮と語られるのに合せて紫君の新枕が描かれていたのに見合うものである点に格別の注意を向けたいと思う。すなわち、藤壺に淵源する二人の人物、冷泉院と紫君とが源氏独自の物語世界を作り上げていることを如実に示すものであって、葵巻で立坊・新枕が語り了えた時点で藤壺の入道が描かれ、いま、即位した冷泉院と己が腹を痛めずして母親の役を演ずる紫君という、葵巻に比して明らかに一段昇った局面に達したとき、藤壺は世を去っていくのである。冷泉院の即位と姫君の誕生は、源氏世界の揺ぎない未来を確実に保証する力である。それは紫君を除外したものではなく、頼りになる身よりを全く持たない形で物語に押し出されてきた紫君は、明石君というライバルの出現が結果としては后がねの姫の養母という紫君の立場の補強に結びつくことになるのであって、明石姫を得た紫君は以前の紫君とは異っていると言わなければならない。だからこそ、紫が「上」と呼ばれてくるのである。もし紫君の据え直しというのであったならば、明石姫を手許に引き取ってそのいつくしみに没頭する可憐な紫君をこそ言うにふさわしいものではなかったか。冷泉院と紫君とが共に確実な安定を手中にしたのを見とどけて藤壺は物語から退場するのである。しかるに、その藤壺が世を去ったとたん、朝顔君が再登場して紫上を根底からつき揺がすのであり、それはあたかも明石姫を得て不動のものになったかに見えた妻の座が、実は見せかけの安定でしかなかったことを紫上に痛烈に思い知らせるのを意図しているかの如くでさえあ

る。作者はほとんど実験的とも言いたいほど、紫上を描くに際してマイナスの要素のみを付与しているのだ。この場面にあつても、紫上が実子を得て現実にしつかり根を下す形で幸せな母親の役を演じているものであつたならば、たとえ源氏に引き取られた事情がどのようなものではないものであつたにせよ、朝顔君の再登場によつてこれほどまでに動揺することはなかつたはずなのである。そして、それはまさに若菜巻での女三宮の降嫁の折にもそのままあてはまる事なのだ。藤裏葉巻で明石姫が東宮妃として入内し、それにつき添つた紫上もまた女御に准ずる待遇をうけるはええしさが語られた直後に、急転して女三宮の降嫁が決定するのである。もし、この場面で紫上の実子が女御になつたものであつたならば、朱雀院が女三宮を源氏に托す希望を持つたか否かは極めて疑しいと言えるのだ。朱雀院が近い縁戚關係に遠慮したであらうというのではなしに、紫上が多くの実子に囲まれ、その栄光の中で幸せな母親であるような人物造型を行つてきた作者にあつて、急転直下、その紫上の幸福を覆すような物語展開はできなかったらうと思われるからである。できたかできないかの問題というよりは、それはもつとつきつめた作者の世界観にかかわるものと言ふべきであらう。つまり、物語の女主人公紫上をどのように描くかという最も源泉的なところで、第一部といへども甘い楽天的な要素は認めがたいのである。朝顔巻が若菜巻女三宮の降嫁に通ずるものがあるのは、まさにその紫上の描かれ方においてであり、紫上の予感を通して捉えられる局面においてである。

十一

そこで注意したいのは、朝顔巻が紫上にとつて危機的な予感として若菜巻の先駆けと指定できるものであつても、朝顔巻が丸ごと女三宮の降嫁に結びつくものではないという点についてである。換言すれば、紫上の苦悩という点では女三宮事件の先駆的ではあつても、源氏の側から見れば朝顔君への懸想は決して女三宮への好奇心と同列に並ぶものではないということである。源氏が朝顔に対して本気になつて恋着しているわけのものでないことは物語本文が明

らかに語るものであり、所詮は源氏の不毛な後向きのすさび心にすぎない。朝顔君の次のような独想によっても、それは明白に窺うことができる。

昔われも人も若やに罪ゆるされたりし世にだに、故宮などの心よせ思したりしを、なほあるまじくはづかしと思ひ聞えてやみにしを、世の末にさだすぎ、つきなき程にて、一声もいとまばゆからむ、三の31ページ

これに対して源氏もまた、「あながちに思し焦らるるにもあらねど、つれなき御気色のうれたきに、負けて止みなむも口惜しく……」（二の33ページ）、ということなのであって、この懸想がいかなる意味でも現実を改変して新しい事態を生み出してくるエネルギーを持つものでないことは自ら明らかと言うべきである。なканずく、朝顔君の心中として、昔お互に若かった時でさえ結ばれなかったものを何で今さら、と語られてくるのはこの事件の不毛性を如実に示している。「さだすぎ」た年輩として源氏の求愛を素直に受けたい状況に加えて、父宮を喪った身として朝顔を取り巻く状態は以前にくらべて著しく悪化していることが右の朝顔の物思いの根底をなしている。その点では、朝顔の境遇は紫上が怖れるほど強力なものでは決してない。むしろ紫上のはかなさに接近したところで登場せしめられているとさえ言えるものであって、源氏の懸想と紫上の悩みの歯車は必ずしも噛み合っていない。源氏が朝顔を手に入れる強い意志に裏うちされているものでないのは明らかであるにもかかわらず、紫上は我が身のはかなさを改めて認識させられるというのであって、言うならば紫上の独り相撲に近いのではあるが、これが逆に紫上の不安がいかに根深いものであるかを示すのに有効でもあったのである。

朝顔に対する源氏の心の動きは、紫上の予感とは別に源氏独自の好き心なのである。それを物語本文では、女房の科白として、「いでや、御すき心の旧りがたきぞ、あたは御疵なめる。軽々しきことも出で来なむ」（三の28ページ）と、噂し合うことが記されているのであるが、それは若菜巻で朱雀院が源氏をして「旧りせぬあだけ」と評したものと全く同軌のものである。それゆえ、この朝顔君に向う心の傾斜の延長上に女三宮の事件が位置するものでないことは明

らかに予測できる。

この朝顔事件と同型の情動を若菜巻に求めるならば、それは臘月夜への慕情の復活を挙げなければならない。いま、両帖の叙述を抜き出して対比すれば次の通りである。

一、朝顔

1 今更に若々しき心地する御簾の前かな。神さびにける年月の労かぞへられ侍るに、今は内外もゆるさせ給ひてむ、 三の22ページ

2 齡の積には、面なくこそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを、今ぞとだに聞えさすべくやは、もてなし給ひける。 三の23ページ

3 過ぎにしもののあはれとり返しつつ、その折々、をかしくもあはれにも、深く見え給ひし御心ばへなども、思ひ出で聞えさす。 三の23ページ

4 見しをりの露忘れぬあさがほの花のさかりは過ぎやしぬぐむ

年月の積も哀とばかりは、然りとも思し知るらむやとなむ、かつは。 三の34ページ

5 今更に若々しき御文書なども、似げなきこと、と思せど、なほかく昔よりもて離れぬ御気色ながら、口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじく思さるれば、さらがへりてまめやかに聞え給ふ。 三の25ページ

二、臘月夜

1 六条の大臣は、あはれに飽かずのみ思してやみにし御あたりなれば、年頃も忘れ難くいかならむ折に対面あらむ、今一度逢ひ見て、その世の事も聞えまほしくのみ思し渡るを、 四の61ページ

2 かの人なる和泉の前の守を召しよせて若々しく、いにしへにかへりて語らひ給ふ。 四の61ページ

3 宵過して、睦じき人の限四五人ばかり、網代車の、昔覚えて、やつれたるに出で給ふ。 四の63ページ

4 いと若やかなる心地もするかな。年月のつもりをも、紛れなく数へらるる心ならひに、かくおぼめかしきは、い
みじうつらくこそ、 四の64ページ

5 いにしへを思し出づるも、誰により、多うはさるいみじき事もありし世の騒ぞ、と思ひ出で給ふに、げに今一度
の対面は、ありもすべかりけりと思し弱るも、もとよりづしやかなる所のおはせざりし人の、年頃はさまざまに世
の中を思ひ知り、来し方を悔しく、公私のことに触れつつ、数もなく思し集めて、いといたく過し給ひにたれど、
昔覚えたる御対面に、その世の事も遠からぬ心地して、え心強くもてなし給はず。 四の65ページ

6 昔藤の宴し給ひし、この頃のことなりけりかし、と思し出づるに、年月のつもりける程も、その折のことかきつ
づけあはれに思さる。 四の65ページ

7 いと若やかなる御ふるまひを、心ながらもゆるされぬことに思しながら、 四の67ページ
この二つの場面が非常に似通っていることは一見して明らかであり、何よりも語られる用語の共通現象においてそれ
は顕著である。たとえば、一の1「今更に若々しき心地」、5「今更に若々しき御文書」は、二の1「若々しくい
しへにかへりて」、4「いと若やかなる心地」、7「いと若やかなる御ふるまひ」に重なるものであり、又、一の2
「齢の積」、4「年月の積」も、二の5「年月のつもりける程」に被っていくものである。そして、これらの共通現
象が共に源氏の年齢的契機に密接した実感を写すところで一致しているのは興味深いものである。つまり、朝顔およ
び朧月夜への恋慕が共に先に指摘した再登場のパターンを踏むものであり、そのゆえに横溢する回顧的情熱という点
で一致するのである。朝顔の場合は、朝顔が葵巻で心強くも靡くまいと決心したものに即応して未発に終るものであ
ったのに対して、朧月夜にあっては昔から重厚ならざる心ざまにより、二の5の如き展開を見るという点でも、それ
ぞれが昔のままの関係のことさらなる再現であることでも一致するのであり、以前との対比が眼前のものになるゆえ
に、共に「若やかなる」心地や振舞と評せざるをえない状況なのである。そして、その回顧的情熱を支配するのは

「齡の積」なのである。言わずもがなのことではあるが、このように描かれてくる情事が新しい未來的な展望に無縁であることは論をまたない。ということは、両者ともに事件的興味——反日常的生活——を第一義にしているかに見えながらも、朝顔の場合には藤壺の死に代表される世代交替現象、隴月夜の場合には朱雀院の出家によって象徴される源氏身辺にしのび寄る老いの事実という、それぞれの情事を取り囲むより大きな状況に反応する源氏の情念という面が顕著なのである。その大きな状況の下で発動する源氏の情動なるがゆえに、結果としては同種同型の情事がくり返されることになるのではあるが、ここではくり返されることにこそ意味があると言わなければならないものなのである。このような情況は、すでに小論第六節以下で述べてきた源氏の変容と完全に一致するものであり、そこに累積している歳月の下での「昔」の意識、および、その個人化された老いの意識の明らかな現れとして朝顔や隴月夜が位置づけられているのである。

朝顔と隴月夜との事件が、物語のパターンとして抜きさしならない近似が認められるものであるが、しかし、それは両者が等質であることを意味しないのは勿論である。朝顔巻においては、朝顔と紫上の二人によって形成される心的な葛藤であったものが、若菜巻では、女三宮が降嫁したという厳然とした変化の中で隴月夜の情事が挟まれているのであって、一方が予感としてありえた危機感であったのに対して、隴月夜の場合には、その予感が現実化した後の弛緩にも似たものになっているのである。それは隴月夜の事件について示す紫上の反応によって明らかに知れる。ここでは紫上は、「今めかしくもなりかへる御有様かな。昔を今に改めて加へ給ふ程、中空なる身の為苦しく」(四の67ページ)と語るのであるが、かつて朝顔に対してはあれほど深刻に悩み怖れた紫上は、この隴月夜に関してはただわずかに怨み言を述べるだけである。この「昔を今に改め加へ給ふ」というのは、昔隴月夜、今女三宮を意味するものと思われ、女三宮の降嫁の現実の前にあつては、源氏の昔の情事の復活、つまり回顧的情熱が紫上を深刻に揺さぶることはもうありえないのである。朝顔巻に認められる危機的予感は、若菜巻では、玉鬘の若菜、女三宮の降嫁、そし

て臘月夜との情事というが如く、より複雑化した人間関係の中で実現してくるのである。この状況の違いとは、それだけ源氏に重い過去が累積していることに外ならないのであって、玉鬘をなつかしむ源氏が一方では臘月夜への恋慕を復活させるという相乗作用になっている。しかも、そのようにさらがえりて若々しい行動に出る源氏とは、紫上の外にもう一人の紫のゆかりを迎え入れた反動のごときものと捉えることができる。

十二

前節で見てきたように、朝顔巻に語られている予感がそのままストレートに伸びて若菜巻に至るものではなく、物語は螺旋状に回転して、明石姫の入内、紫上の女御に准ずる待遇、そして源氏の准太上天皇というように、薄雲朝顔巻前後の状況にくらべると明らかに一階層上にのぼった展開になっている。それは源氏三十代の物語から四十代の物語への展舒に外ならない。そこにおいて、朝顔巻前後から若菜巻への物語の流れの中に、紫上に被せてもう一人の紫のゆかりの出現を誘い出すいかなる要因があるのかが次なる課題となろう。

朝顔巻から若菜巻までを埋める物語が、人物単元で言えば、夕霧と玉鬘をめぐる話題に絞られることに注意を向けたい。少女巻は夕霧の幼い恋を描きつつ、夕霧の恋うる五節の舞姫がそのまま源氏のかつての恋人筑紫の五節への回憶に重ねられていくところに、朝顔巻と同型の昔の恋人へ傾斜する心が認められるのであった。しかし、玉鬘の登場は柏木や螢宮・髭黒として夕霧をも含めて多くの求婚者が勢揃いする一方で、源氏もまた養父と懸想人とに屈折する緊張が存したのであるが、この一連の流れの中のポイントは、少女巻で元服を果たした夕霧が常に事件のインサイダーになりうる可能性を帯びて語られてくる点にあると思われる。勿論、夕霧が決して源氏の再来にはなりえないことはこれまで述べてきた通りであるのだが、源氏の回顧的情熱の反面を形成するものとして、玉鬘の求婚者にもなりうる夕霧という描かれ方がなされている所に、源氏の内側を規制する老いの問題がかくされていると言えるのであ

る。つまり、事件の当事者になる人物が、夕霧や柏木などの次なる世代に移ろうとしている徴候が、徐々に表面に出はじめようとしている。その最も象徴的な挿話として、野分巻で夕霧が紫上を垣間見て、ひそかにではあるが強い衝撃を受ける場面が指摘できる。玉鬘をめぐる求婚者の群れの中に、養父でありながら屈折した懸想に悩む源氏を描く一方で、夕霧が父源氏の正妻格の女性に心を奪れるという二重の犯しの可能性を孕んで、玉鬘十帖のこの上ないみやびな物語が悠々と進行しているのである。玉鬘をめぐって源氏と柏木ないしは夕霧が、養父と異母兄妹というそれぞれに近親相愛的な葛藤の様相を呈しながら、同時に紫上に心惹かれる夕霧が描かれてくるのである。秋好中宮に心ひかれ玉鬘に懸想ばむ源氏は、明らかに藤壺にあこがれ朧月夜と契った系譜の上に位置づけられる情念の動きである一方で、その逆転として、源氏が妻を奪れる展開への予感が語られようとしているのだ。妻を奪れる源氏という構想が、作者によってどの時点で着想されたものなのかの具体的な識別は、所詮は不可能であって、この野分巻ではじめて意識された構想などと強弁するつもりは全くない。ここでの問題は、玉鬘に向う源氏の心と紫上を意識する夕霧と、というまさに対立する二つの情動の交錯するのが、夕霧元服後で三十代の半ばに達した源氏世界の様態であるという事実そのものである。

桐壺帝——藤壺——源氏という関係の最も正確な逆転図は、源氏——紫上——夕霧という関係であることは明白である。その報いへの兆しが野分巻の緊張になっているのだが、この密通の可能性は最も奥に秘められた語られざる主題として、物語の翳の部分にならざるをえないものであった。紫上は源氏の完全な教育によっていかなる隙もない女性であり、同様にして夕霧もまた決して暴発することのない健全な常識人に生い立っている。しかも、己れの体験から男女の仲の不可思議さをよく自覚している源氏が、日頃から夕霧への警戒を怠らないと語られている以上、夕霧が紫上とあやまちを犯す可能性は零に等しい。人物の各々をそのように描き進めてなおかつ、夕霧が紫上と密通する展開を語るとしたならば、それは作者が一貫して語り続けてきた理想者の内面を語る主題の自己否定でしかないし、ギ

リシヤ悲劇的な運命そのものの物語に転じてしまふであらう。さりとて、私は源氏物語をして性格悲劇だなどと言ううとしてゐるのではない。藤壺の事件は何らかの形で応報を見なければならぬ根源的な宿命の主題でありながら、紫上も夕霧も事件の当事者になるような造型はされていない。さらに注目したいことは、野分巻の源氏は壮者の榮光に包まれていて、妻を奪れる笑止な役を演ずる衰えには全く無縁であることについてである。前に指摘したように、玉鬘十帖の源氏は夕霧や柏木に向つて冗談めかして己れの老いを語るものではあつたが、それは若さを過ぎて未だ老いを迎えるに至らない微妙な平衡した年齢的契機を意味するものであつた。その源氏が若冠に苦杯を喫することなどありうべくもない。若菜巻で柏木が女三宮に絶望的な慕情を寄せ、「世の中定めなきを、大臣の君もとより本意ありて、思ひ掟てたる方におもむき給はば……」（四の107頁）と、源氏の出家にはかない希望をつなぐ心が語られているのであつたが、その柏木の心からも、源氏が健在でゐる限りいかにしても源氏を越えることの不可能なことが判明する。事実、柏木が女三宮に接近できたのは、紫上の重病による二条院転居後であり、源氏の不在の六条院であつた。だから、野分巻でいかに夕霧が紫上に心を尽しても、この場で事態が急旋回するわけのものでないことは確實なのであるが、源氏が己れの老いを予感しはじめるのに歩調を合せて、徐々にしのび寄る運命の予感が語られる点に注目しなければならぬのである。光源氏の物語は、藤壺とのかかわりを物語構成の最も奥深い原理にしていることは疑いえないものであるが、藤壺事件そのものが主題であるとは必ずしも言いきれない。言い換えれば、藤壺事件の罪があがなうために物語が語り続けられているものではない。その意味では、この物語に因果律の安易な適用を試みるのは誤りであらう。源氏が生き続けて榮華を窮めながら、その晩年に至つて結果として藤壺事件との照応を見るものなのであり、源氏は最後の最後まで理想者であり続ける。源氏は紫上夕霧の裏切りによつて敗北するのではない。ましてや柏木という特定個人にうち負かされるのではない。六条御息所の死霊によつて導かれる源氏自身の運命によつて自

ら敗北するのであった。

この野分巻の挿話を介在させて女三宮の登場を照射するとき、女三宮がもう一人の紫のゆかりとして紫上に重ね合せられてくる意義が鮮明に浮び上ってくるのだ。紫上と夕霧との間においては決して実現させることのできないもの、藤壺事件の応報としての密通の主役を演ずるべく登場が要請されるのであり、だからこそ、藤壺の血筋を引くものと描かれなければならないのである。つまり、もう一人の紫のゆかり・女三宮は、明らかに紫上の身代りと把握されるのであり、柏木は夕霧の代役と言うべきものである。若菜巻で蹴鞠の夕べ、柏木が女三宮の姿を隙見して心を奪れる場面以下で、柏木の女三宮に対する心と常に表裏する関係でもって、夕霧の紫上に向う心が語られている事からも、源氏——女三宮——柏木の事件の背後には、より根源的な三角関係、源氏——紫上——夕霧の事件がポテンシャルに秘められていると言うことが出来るであろう。しかしながら、ここでもまた誤解のないようにつけ加えたいのだが、野分巻の危機的な予感には決して女三宮事件の伏線なのではない。それは朝顔君の再登場が女三宮出現の伏線ではなかったのと全く同断である。野分巻における垣間見の挿話は、玉鬘十帖の中にあつては挿話以上のものではない。そこでは一夕の野分きが、あれ程の華麗を誇った秋の御殿の秋の景観を一举に覆してしまふ移ろいに主想がある。と目される。地上の極楽にも見紛う六条院の太平に野分きが吹き荒れて、いつか訪れるにちがいない源氏世界の凋落の秋を暗示するものがあるという関係の上で、紫上に心惹かれる夕霧の挿話が意味を持つのである。

そこで再び三たび、玉鬘十帖の主流を形作っている玉鬘の問題に立ち戻らなければならないのだ。先に河内山清彦氏の高見を引いて論じたように、玉鬘の物語は多くの点で女三宮の物語に共通する要素を持っているのであるが、それは窮極のところ、玉鬘の退場が女三宮の出現を促してくるものに作動しているという関係に集約できるのであるまいか。玉鬘と女三宮とは、共に源氏には娘分に当るという点で共通する基盤に立ち、そこに両者がほぼ同一な求婚者群を持ついわれが存したと考えられるのであるが、六条院の新造に際して新しい緊張として登場した玉鬘が退場

したあと、准太上天皇にふさわしい女性として女三宮が話題になるというように、この二人の女性の進退は太政大臣から准上皇への源氏の歩みに即応していると言えるものである。そこで注目したいことは、玉鬘をめぐる源氏の懸想は前に触れたように、源氏の独り相撲に近いものでしかなかったのに対して、玉鬘が本当の意味で源氏世界にかかわりを持つてくるのは、急転して髭黒大将の手に落ちるという展開に至ってからである、という点に關してである。藤袴巻までの物語においては、玉鬘は冷泉院のたつての希望により尚侍として宮中に入るのが必至という情勢であったのであるが、真木柱巻では読者の意表をついて髭黒と結ばれたことが明らかにされる。玉鬘自身の心情としては、むしろ螢宮を憎くからず意識するものと語られていたのであって、真木柱巻で知らされる結末は玉鬘にとっても意外なものであったと言えよう。しかしながら、物語の展開としては、少くとも藤袴巻末の時点で作者が明らかに髭黒をクローズアップさせる意図を持っていたと考えられるのである。それまで、その他大勢の求婚者の一人として、髭がちな武骨な大将としか描かれなかった髭黒が、藤袴巻末に至って改めて経歴が紹介されて、東宮女御の兄であり紫上の異母姉を北の方に持つ天下第三の有力者と語り出されてくる。

この大将は、春宮の女御の御兄弟にぞおはしける。大臣たちを措き奉りて、さしつぎの御おぼえ、いとやむごとなき君なり。年卅二三の程にものし給ふ。北の方は紫の上の御姉ぞかし。式部卿の宮の御大君よ。年の程三つ四つが年長は、殊なるかたはにもあらぬを、人がらや如何おはしけむ、軀とつけて心にも入れず、いかで背きなむと思へり。その筋により、六条の大臣は、大将の御事は、似げなくいとほしからむと思したるなめり。 三の275頁

玉鬘の身の振り方として髭黒の北の方に落着くのは、彼女の実父である内大臣などにとっては歓迎すべきことに相違ないのであるが、紫上にとっては最も好ましくない結末だったのである。玉鬘そのものは朝顔君の場合とは異なり、紫上には必ずしも脅威を与えるものではなかったのであるが、髭黒の手中に帰して玉鬘の物語に決着がつく段階になって、髭黒のものと北の方が紫上の異母姉であるという形で紫上にも関係が生じてくる設定は、まさに秀抜の一語に

尽きよう。しかも、髭黒の北の方が新しい妻の出現によって非常にはしたない状態に追いやられるのは、前妻と後妻の問題として紫上が朝顔巻で深刻に悩んだものに外ならないのであり、女三宮の出現で現実のものとな体験しなければならぬことなのである。それは単に、紫上がこの髭黒のものと北の方と同じ境遇になるかもしれないという形で女三宮の出現の先取りになっているというだけのことではなく、もしそのような境遇におち込んだとしても紫上には帰るべき所がないという意味において、ここで改めて紫上の極限状況が作り出されていると言うことができるのである。父宮が健在である紫上には、本来ならば孤児のものはかなさなど無縁であるべきなのに、これまでも一貫して腹黒い継母による継子いじめのニュアンスによって紫上の孤立が語られていたのであったが、紫上の差し金によって実の娘が不幸に泣くと曲解する継母の激怒により、ここに至って紫上の帰るべき唯一の場所が決定的に喪われてしまうのである。その意味では、髭黒のものと北の方は、玉鬘の出現によって長年つれ添い三人の子供までもうけた夫との仲をさかれる破鏡の嘆を見ながらも、しかもなお親の家と可憐な娘があった点では、紫上よりもまだ恵まれていると言ふべきであろう。前述したように、物語状況のことごとくが紫上に対してマイナスに作用しているという実例が、この玉鬘の退場に際しても認められる。これは若菜巻で女三宮の降嫁を知った紫上があれこれと物思いにふけりながら、

……おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかるべき方なきものから、をこがましく思ひ結ばほるさま、世の人に漏り聞えじ、式部卿の宮の大北の方、常にうけはしげなる事どもを宣ひ出でつつ、あぢきなき大将の御事にさへ、あやしきうらみ嫉み給ふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひ合せ給はむ、などおいらかなる人の御心といへど、いかでかはかばかりの限はなからむ。 四の43頁

と物語られていることから如実に窺われるのである。紫上が女三宮の降嫁の事を知って何よりも先ず、継母の思惑を忖度せざるをえないというのは、この紫上の思考を正当づける状況を作者がすでに語っていたからこそ意味がある

のであって、それはすなわち、真木柱巻に描かれている大北の方の紫上に対する呪詛に外ならない。ということとは、藤袴巻末で髭黒の北の方が紫上の異母姉であると記したとき、作者は紫上を越える女性の出現をすでに何らかの形で考えていたことを意味するのではなかったか。玉鬘が尚侍として帝の寵愛を受けるという形で退場したり、或いは螢宮と結ばれるものとして退場が完了するものであったならば、それはただ玉鬘が六条院での役割を終えて姿を消すというだけのものではないのに、そこで式部卿宮の大北の方がかわることによって、玉鬘の退場が直接に紫上の運命に暗い翳をなげかける働きを持っていたのである。そこに、真木柱巻に続く梅枝巻で紫上が改めて「対の上」と呼び直されてくる直接の動機がありえたのではなかったか。玉上琢弥氏が、梅枝巻で紫上が対屋に住むものと語られてくることに注目され、それが作者によって南の御殿の寢殿に紫上を凌駕する高貴な姫を登場させる用意があつてのこと、と解されたのは問題の核心を鋭くえぐるものであつた。^{注16}野分巻で紫上は寢殿に住いするものと推定されたものが、梅枝巻で改めて「対の上」と呼び直されてくるためには、真木柱巻での大北の方の呪詛がこの上なく適切であり、髭黒のものと北の方の悲運、つまり年若い後妻の出現によって浮き上つてしまふ前妻の問題、しかもそれは朝顔巻ですでに予感として描くものであつた問題を、実際に紫上の身の上に当てはめて語る意図を具体的に持ったことを意味しているのではなからうか。その場合、野分巻で紫上が六条院南の町の寢殿に居ると考えられる点に改めて注意を払いたい。前述したように、野分巻は夕霧が紫上を垣間見る挿話を含むのであって、物語展開の上で極めて暗示的であり同時に運命的な未来を予感させるものであつた。してみると、作者は藤壺事件の応報を語る意図は持ちつつも、野分巻の段階においては、紫上を圧倒して登場する正室の構想は具体的には未だ持つてはいなかったと考えることが許されるであらう。朝顔巻での危機的予感や野分巻での応報の予感を語りながら、それらは具体的な事件の展開を模索する過程であつたと言ふべきであらうか。

源氏物語の作者がどのように物語の構想を押し進めていったか、その着想の過程を細部にわたって復元することは到底叶うものではない。ただ、いかな天才とはいえ、神仏の加護によって何の苦勞もなく靈感のおもむくままに書き上げたものとするならば、あまりに樂天的すぎよう。苦渋に満ちて語りついでいったものと思われる。それは物語状況の細部において明らかな誤謬を含んでいることから考えられることである。たとえば、若菜巻で玉鬘が若菜を奉る場面において、二人の童兒を同伴すると語られるものが旧来の年立的秩序に合わないものであることが高橋和夫氏によって論じられており、また、同じ場面ですでに夕霧が父親になっていると語られるものが、藤裏葉巻でやっと婚姻を結んだばかりの夕霧にはなじまない事が伊藤博氏によって論じられている。^{註17}伊藤氏はこれらを「構想の継ぎ目」として捉えられたのであるが従うべき見解である。そして、このような誤謬を含むことは、藤裏葉巻から若菜巻への展開が作者にとって決して平坦な道のりでなかった事の結果と解せられるものではあるまいか。朝顔巻・野分巻・真木柱巻そして梅枝巻と、徐々に、しかも確実に紫上を追いつめながらも、それが実際にもう一人の紫のゆかりとしての女三宮の造型に結実するためには、大変な飛躍を必要としたのではなかったか。この子供らにまつわる錯誤は年立的操作で割り切れるものではない。玉鬘が二人目の子供を儲け、夕霧も父親になっている状態としては、単純に言えば藤裏葉巻と若菜巻の間に一年の幅を持たせれば解消するものであるが、夕霧の婚姻が語られる同帖は源氏四十賀の予告が行われる巻であって、この両帖は密接する関係が第一義と認定せざるをえないものである。つまり、源氏の年齢的契機を軸にする物語構想と場面を支配する構想との間に破綻が生じているのであるが、その場合に、源氏を描く構想が主であり、それに従属するものとして場面の論理があると認定すべきものであることは贅言を要しまい。ということは、女三宮を登場させる場面にあつて、玉鬘が二人の童兒を伴い夕霧もまた父親になっている状況が、作者に

あつてより妥当なものであつたという事であろう。これが作者の単純な不注意によるミスなのか、若菜巻の源氏をめぐる環境としてあえて作り出した状態であつたのかの実際はわからない。これとほぼ同様なことが、少女巻と玉鬘巻の接続関係についても認められる。周知のように、その接続をどう見るかで新旧年立が分れるのであるが、少女巻末の六条院四季の構想から見れば、少女巻の秋好中宮から紫上への挑みは、当然、胡蝶巻の春の場面に直接すると考えるのが穩当であるのだが、少女巻と胡蝶巻との間には、六条院に玉鬘が登場しているか否かというほとんど質的な違いとさえ言えるほどの変化を含んでいる点に注意しなければならないのだ。新旧年立の論点を「二律排反」と捉えられた高橋和夫氏は、作者の「心理的事実」として玉鬘巻では六条院がまだ完成していないことを忘れてしまつていたゆえ、として新年立に妥当性を見られたのであつた。^{註10} 二律排反である以上、この高橋氏の説明はそのまま裏返しして、玉鬘を登場させ終えた作者が、少女巻の末尾と胡蝶巻とが中に一年の隔りを持つていることを失念したとも言える可能性が残されている。あるいは、玉鬘巻の場合、玉鬘の登場の段階では少女巻を引きついで年紀的に順接するものと語りながら、玉鬘を投入し了えた時点で再び四季の挑み合いの構想に復帰して、その間に一年の幅を含みながらあえて紫上から秋好中宮への答歌が語られたものかもしれないのだ。ここでも源氏の年立的契機と場面の契機とが矛盾している。私はその場合には源氏に密着する年齢的な契機を重視したのである。この若菜巻と玉鬘巻とが共に新しい人物の投入による局面の展開、すなわち新しい緊張関係の設定という点で同じいのであり、そこに年立上の問題がからんでいるのは、それら人物の造型が作者にとってどれほど困難な作業であつたかを物語るものではあるまいか。このような構想過程の苦渋のあとと推量されるものを外在的に成立事情として後記挿入と解き、あるいは第一部と第二部との主題の相違に由来すると解くことが果して正当であるかどうか、私は疑念を払いきることが出来ないのである。玉鬘十帖が玉鬘の出現と退場とによって極めて良くまとまつた物語であることに加えて、その登場が唐突であり少女巻との接続が悪いことなどによって、少女巻と梅枝巻の光源氏プロバの物語に異質的に介在挿入されたも

のという論点は、これまで成立過程の論として多く論じられる所であった。しかしながら、巻と巻との接続の悪さを成立時期の違いによる作者の構想のずれで説明する考え方の他に、作者が試行錯誤を経ながら一步一步物語を押し伸していった軌跡と解する観方も有効性があるのではなからうか。現代の理解から推して物語の続き具合が不自然である箇所を、すべて成立事情による歪みとするのは、やはり問題が多すぎると言わざるをえまい。何をもって自然とし、また、不自然とするか、その尺度は極めて曖昧である。光源氏を語る物語にあって、新しく人物を登場させ、あるいは再登場させる巻は、巻々の接続関係がほとんどすべて“不自然”である点に注意したい。すなわち、花散里巻・蓬生関屋巻・朝顔巻・玉鬘巻そして若菜巻などである。これらがすべて成立の事情によるものと裁断することは出来まい。成立事情ないしは成立過程という観点は、執筆時期の先後のみならず作者の想念における構想の過程をも含めて考えるべきではなからうか。

新しい人物を登所させることが、その人物の社会的地位・血縁関係などの総体によって、物語の新しい局面による新しい可能性の実現を作者は意図しているものの如くである。森一郎氏が説かれた通り、主題性に奉仕するべく人物は投入されるのである。しかも、物語上の人物は恣意的に出し入れされるのではなく、常に源氏自身の過去、それも物語に実際に語られた過去に密着する意味の下に操作されるのである。つまり、現象的にどのように唐突な出現であったとしても、源氏の過去にかかわるものとして、源氏の側に登場を要請する契機が常に内在していることを見逃すことはできないのだ。物語の伸展が単に局面的平板的な拡散、目先の変化を追っているのではなく、各々の事件が積み重ねられていく重みが次の局面を析出させるエネルギーになっているという意味において、私は先にこの物語の構造を螺旋状に回転すると言ったのである。人物の次々の再登場によって物語が螺旋状に押し上げられていく物語構造を実効あらしめているものは、源氏の上に累積する歲月であり、累積する歲月が螺旋状に伸展する構造がもたらす内質とは、すなわち、源氏と紫上の仲らいなのである。いわゆる第一部においてさえ、物語における予言の果す機能

を誇大に考えるのは誤りと思われる。予言が源氏の子女にかかわるものという点で長篇的な展望を持つことは否定できないが、実際に物語を押し進めていく力は決して予言そのものではない。「源氏」の子が帝位に即き、播磨の前司の娘が中宮の実母になるという、極めて特殊な内容による源氏の栄華を語る上で、予言が物語のリアリティを高める機能を果たしていたと言えようけれども、予言にかかわる栄華の実現のみが第一部世界のすべてではない。その栄華の内側が物語の実質なのである。そして、そこに日記的な時間の連続による源氏の私生活が写されるのであり、日記的時間を受けとめる人物が紫上に外ならないのである。御法巻で紫上が世を去ったあと、地上のすべてに興味を喪ってしまった源氏の心象が幻巻で語られているが、その事によっても源氏にとって紫上が何であったかが明らかになるであろう。紫上を愛する源氏を描くことが、光源氏の物語であったと言えるのだ。作者は理想人物光源氏を創り出し、さらにその源氏が創り出した紫上を語るというかたちをとって物語を成り立たせている。つまり、紫上があらゆる面で源氏に依存しているという関係は、裏返しすれば、紫上を愛するが故に源氏の理想人物の生命が描かれているという関係に外ならず、それが紫上のいない地上においてはどんな女性にも心を動かすことのない源氏ということになるのである。古来、この物語が「紫の物語」とも呼ばれていたというのは十分に意味のあることと言わねばならない。

紫式部日記の有名な一節、

左衛門の督「あなかしこ此のわたりに、若紫やさぶらふ」とうかがひ給ふ、源氏ににるべき人も見え給はぬに、彼の上は、まいていかかものし給はむ、と聞きゐたり。

ここからも、紫式部が紫上創造にどれほど自負するものを持っていたか、十分に推し量れよう。源氏あつての紫上という関係を誇りと共に語っている。すなわち、現実には光源氏はいるべくもない以上、源氏を己れの宇宙とする紫上など存在するわけがないことは必定なのであって、源氏が物語上のみありえた理想者であると等しく、あるいはそれ以上に、紫上は物語の中にしかありえない女性として、己れの作り上げた虚構世界の純粋性を語るのである。

私はこの小論において、物語に認められる各現象を非常に割り切った形で論じ進めてきた。それは作者がどれ程苦しみながら物語を語り継いでいったかという過程をあえて捨象して、あたかもコロンブスの卵を再証明するかの如くに、作者の志向したと思われるプロセスを直線に置き換える作業を行ってきたのであった。女三宮を六条院に登場させ、やがて一挙に藤壺事件との照応たる晩年の源氏まで描いていく過程が、尋常一様のものでないことが十分に察せられるにもかかわらず、物語の展開は私の拙い分析に十二分に耐える緻密な構造を持っている。論じ残した問題の大きさと深さに空怖ろしさを感じつつ擱筆しなければならない。

注

- 1 与謝野晶子「紫式部新考」(太陽 昭3・1、2)、日本文学研究資料叢書『源氏物語I』(有精堂 昭44・10)による。
- 2 拙稿「源氏物語の方法についての試論——時間的秩序をめぐって——」(藤女子大学国文学雑誌2 昭42・6)
- 3 古岡曠「若菜・柏本物語論序説」(学習院大学文学部研究年報9、昭38・2、のち『源氏物語論』(笠間書院 昭47・11)に所収。
- 4 拙稿「作品構造の分析・源氏物語——年立をめぐって——」(国文学 昭45)
- 5 河内山清彦「『若菜』巻の発端——秋山虔氏の『方法』の検証——」(青山学院女子短期大学紀要24 昭45・11)、「紫上の晩年(上)——女性史的発想を排す——」(青山学院女子短期大学紀要25 昭46・11)
- 6 秋山虔「源氏物語の方法に関する断章——『若菜』巻冒頭をめぐって——」(『平安文学研究と資料——源氏物語を中心に——』至文堂 昭34・11)、のち『源氏物語の世界』(東大出版会 昭39・12)に所収。
- 7 今井源衛「女三宮の降嫁」(文学 昭30・6)のち、『源氏物語の研究』(未来社 昭37・7)に所収。石田稔「『若菜巻について』(国語と国文学 昭30・11)のち『源氏物語論集』(桜楓社 昭47)に所収。
- 8 今井氏の前掲書一四九ページの追記。
- 9 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」(国語国文 昭40・4)のち『源氏物語の方法』(桜楓社 昭44)所収。
- 10 清水好子「源氏物語論」(塙書房 昭41)
- 11 松尾聡「紫上論——一つのやや奇矯なる試論——」(解釈と鑑賞 昭24・8)のち『平安時代物語論考』(笠間書院 昭43)所収。同書一五四ページ。

- 12 阿部秋生「紫の上の出家」(『平安文学研究と資料——源氏物語を中心に——』(至文堂 昭34) 所収。同書三一ページ。
 13 秋山虔「紫上の初期について」(『国文学 昭36・5』)のち『源氏物語の世界』所収。同書九二ページ。
 14 秋出虔「紫上の変貌」(『国文学 昭39・5』)のち前掲書所収。同書一〇〇ページ。
 15 注14と同じ。同書一一〇ページ。
 16 玉上琢弥『源氏物語評釈6』(角川書店 昭41) 三一—ページ。
 17 高橋和夫「源氏物語年紀攻」(『源氏物語の主題と構想』(桜楓社 昭41) 所収。
 18 伊藤博「源氏物語における構想の継ぎ目——若菜巻の場合——」(『国文学 昭47・12』)
 19 注17と同じ。同書一六一ページ。